

日本におけるケージフリー採卵養鶏の実態と課題 ーケージフリーアンケート調査結果からー

大木茂（麻布大学獣医学部）

ooki@azabu-u.ac.jp

問題意識

世界鶏卵機関（World Egg Organization : WEO、2024までinternational egg commission）が2024年に発表した非ケージ飼育羽数構成比の世界統計によれば日本は3.5%と前年の5.9%より2.4%低下した。また動物擁護団体（Animal Rights Center）の調査（2023年）では、日本におけるケージフリー比率は1.1%程度と推計し、キューピーのホームページでも現状は1%程度の認識（2024.10、推計値）を示した。

日本におけるケージフリー（Cage Free : CF）採卵養鶏の羽数構成比としてWEOのデータを用いるケースが少なくないが5.9%か3.5%か1%では大きく異なる。

日本におけるケージフリーのシェアは、現行消費者ニーズを把握する上で不可欠のデータであり、今後の日本の養鶏産業のあり方を検討し、適切な政策を示す上で基本となる。また先のWEOデータによれば日本は世界有数の1人当たり鶏卵消費国であることからシェア把握の意義は小さくない。

以上から把握可能な養鶏経営への質問紙を用いた調査により、ケージフリー経営の実態把握を試みた。

項目

課題と方法

データの制約

回答の都道府県

飼養羽数と飼養方法

飼養方法別飼養羽数

飼養形態別飼養羽数

鶏舎構造別飼養羽数

飼養方法別飼養スペース

施設・品種・処置・開始年・開始理由・学んだ方法

設置施設

採卵鶏の品種と処置（ビークトリミング、誘導換羽）

ケージフリー開始年

ケージフリーを始めた理由

ケージフリーの飼養方法を学んだ方法

考え方・課題認識

ケージフリーの技術的課題（自由回答、選択肢）

ケージフリーの経営的課題（自由回答、選択肢）

採卵養鶏のあり方（選択肢、自由回答）

卵殻印字への意見（選択肢、自由回答）

今後ケージフリーを増やしたいか（選択肢、自由回答）

ケージフリーのメリット・デメリット認識

鶏にとってのメリット・デメリット

経営・労働者にとってのメリット・デメリット

ケージフリーに取り組む条件

まとめと残された課題

<本文の略称>

* ケージのみの経営：C経営

ケージフリーのみの経営：CF経営

ケージとケージフリー共に行う経営：並行（生産）経営

課題と方法

令和6年（2024）畜産統計によれば、成鶏めす飼養羽数1,000羽以上の飼養者は1,640戸とされる。しかし「同一飼養者が市区町村をまたいで複数の飼養地（畜舎）を持っている場合、畜舎が所在する市区町村ごとに1飼養者」とすることから、大手企業は複数カウントされているケースがあり、実際の経営数はより少ないと考えられる。

そこで、

- ①インターネット・新聞・雑誌等で紹介された採卵養鶏企業（2024年10月まで）
鶏鳴新聞（2019年以降）、養鶏の友（2022年以降）、鶏卵肉情報（2014年以降）、鶏の研究（2018年以降）
- ②各種畜産認証を取得している経営
JGAP認証、農場HACCP認証、アニマルウェルフェア認証
- ③ケージフリー推進支援団体からの協力
- ④各県の養鶏協会のHP記載の養鶏経営リスト、CMやHP検索で把握可能な採卵鶏企業、等

以上に基づき、691経営・農場をリスト化、2025年2月にアンケート調査票を郵送し3月末までに147通の回答を得た（回収率21.2%）。このうち有効回答138票について集計分析

データの制約 1

アンケート発送数 畜産統計（2024）の数字上では成鶏メス飼養の採卵養鶏農家の42.1%（691/1,640戸）

⇒ 網羅的・統計的な手法でない制約

⇒ ただし本調査におけるケージフリー経営74戸の回答数は、
2015年畜産技術協会「採卵鶏の飼養実態アンケート調査報告書」における平飼い経営回答数53戸を上回る

アンケート回収状況

有効回答 138票

ケージ飼育のみの経営 64戸（C経営）

ケージフリー飼育のみの経営 53戸（CF経営）

ケージ飼育とケージフリー飼育の並行生産経営21戸（並行生産経営）

回答の特徴（農林水産省調査2025との対比）

- ・ C経営の構成比が低い
- ・ CF経営の構成比が高い
- ・ 主要大手ケージ経営、大手ケージフリー経営の回答不明
- ・ 畜産統計対象外の1,000羽未満経営がCF経営で19経営含む（農水省調査：1000羽未満を含みヒナ・育成のみ15経営含む）

飼養方法別経営の構成比

	本調査		農水省調査(2025.6)	
	回答数	構成比	回答数	構成比
合計	138	100.0%	408	100.0%
ケージ飼育のみの経営	64	46.4%	304	74.5%
ケージフリー飼育のみの経営	53	38.4%	59	14.5%
ケージ飼育・ケージフリー飼育並行生産経営	21	15.2%	45	11.0%

資料：農水省令和6年度「アニマルウェルフェアに関する飼養管理指針」の取組状況に係る調査、採卵鶏の結果（詳細版）（2025.6.27） なお農水省調査はケージフリーを平飼い（放牧など含む）と標記

データの制約 2

回答経営の構成比

- 農水省調査（2025）と比較して、1万羽未満層の回答構成比が高い
- センサス（2020）と比較して、50万羽以上・10～50万羽構成比高く、10万羽未満構成比低い

成鶏飼養羽数規模別回答数

合計	調査結果		農水省調査(2025.6)	
	137	100.0%	391	100.0%
50万羽以上	13	9.5%	38	9.7%
10～50万羽未満	33	24.1%	106	27.1%
5～10万羽未満	7	5.1%	47	12.0%
1～5万羽未満	34	24.8%	91	23.3%
5千～1万羽未満	11	8.0%	69	17.6%
1千～5千未満	20	14.6%		
1千羽未満	19	13.9%	40	10.2%

注1：羽数不明 1（C経営）

注2：農水省調査はスライド 4 に同じ.対象経営は成鶏1,000羽未満を含む.ひな・育成のみ経営を除く.

販売目的で採卵鶏を飼っている経営体数と飼養羽数（2020年センサス:全国）

販売目的の 採卵鶏飼養羽数規模 別	農業経営体		構成比		規模1000羽以上を 100とした構成比	
	飼養実経 営体数	飼養羽数	飼養実経 営体数	飼養羽 数	飼養実経 営体数	飼養羽数
計	経営体 3,010	100羽 1,741,645	経営体 100.0%	羽 100.0%	経営体 1,639	100羽 1,739,361
1～299羽	1,056	687	35.1%	0.0%		
300～999	315	1,599	10.5%	0.1%		
1,000～4,999	385	9,072	12.8%	0.5%	23.5%	0.5%
5,000～9,999	205	13,971	6.8%	0.8%	12.5%	0.8%
10,000～49,999	496	114,878	16.5%	6.6%	30.3%	6.6%
50,000～99,999	183	125,996	6.1%	7.2%	11.2%	7.2%
100,000～299,999	221	378,746	7.3%	21.7%	13.5%	21.8%
300,000～499,999	71	264,897	2.4%	15.2%	4.3%	15.2%
500,000羽以上	78	831,801	2.6%	47.8%	4.8%	47.8%

注：種鶏を含まない、ヒナを含む。

回答票の都道府県

回答は、1道2府37県

20票は所在地記入なし

○回収票の採卵鶏（成鶏）羽数捕捉率 21.8%

2024年畜産統計成鶏めす羽数 129,729千羽、アンケート回収経営合計羽数28,262千羽

ケージフリー羽数比率 3.17%（896,410羽／28,261,650羽）

○1経営平均

ケージ経営 28.7万羽

ケージフリー経営 0.57万羽

ケージ・ケージフリー平行生産経営 ケージ44.1万羽、ケージフリー2.82万羽

調査票の回答があった経営の所在地（回答数）

回答数		138		不明		20
北海道	7	長野県	5	鳥取県		1
青森県	4	山梨県	0	広島県		1
秋田県	3	静岡県	3	島根県		3
岩手県	0	愛知県	5	山口県		0
山形県	2	岐阜県	4	香川県		2
宮城県	2	富山県	1	徳島県		0
福島県	6	石川県	0	愛媛県		1
新潟県	2	福井県	0	高知県		1
栃木県	3	三重県	3	福岡県		3
茨城県	15	滋賀県	1	佐賀県		1
群馬県	4	奈良県	1	長崎県		1
千葉県	4	和歌山県	1	大分県		2
埼玉県	7	大阪府	1	熊本県		2
東京都	0	京都府	1	宮崎県		2
神奈川県	3	兵庫県	5	鹿児島県		3
		岡山県	1	沖縄県		1

飼養方法別飼養羽数

ケージフリーの特徴

並行生産におけるCF羽数が合計も平均も大きい

	並行生産経営	CF経営
ケージフリー合計	59.4万羽	30.3万羽
1 経営平均	2.82万羽	0.57万羽

畜産統計（2024）1戸平均飼養羽数7.91万羽

CF経営で採卵鶏平均羽数を上回るのは 1 経営 一方、並行生産経営で採卵鶏平均羽数を上回るのは10経営

並行生産経営のうちCFだけで採卵鶏平均を上回るのは 2 経営

経営タイプ別・飼養法別成鶏羽数

回答数		総合計 138	ケージ経営 64	ケージフリー経営 53	並行生産経営 21
採卵鶏成鶏 羽数	合計	28,261,650	18,086,940	302,850	9,871,860
	平均	206,289	287,094	5,714	470,089
ケージ羽数	合計	27,365,240	18,086,940	—	9,278,300
	平均	325,777	287,094		441,824
ケージフ リー羽数	合計	896,410	—	302,850	593,560
	平均	12,114		5,714	28,265

飼養形態別飼養羽数（ケージフリー）

ケージフリーのうち、単層平飼いは59.9%、エイビアリーは33.2%、フリーレンジは5.2%、オーガニックは1.4%

並行生産経営は、ケージフリー全体の66.2% 単層平飼いの47.1%、エイビアリーの100.0%、フリーレンジの71.5%、オーガニックの79.2%を占める

エイビアリーはCF経営では0.0%
エイビアリーコンビタイプは、並行生産経営でも0.0%（回答票による）

*エイビアリーコンビタイプ：状況に応じて多段式平飼いの平飼い部分に柵を立ててエンリッチドケージ様に飼養できる

飼養形態別飼養羽数（ケージフリー）

		合計	単層平飼い	エイビアリー	エイビアリーコンビタイプ	フリーレンジ	オーガニック
合計	羽数	896,410	536,690	297,900	0	46,290	12,630
	構成比	100.0	59.9	33.2	0.0	5.2	1.4
CF経営	羽数	302,850	284,130	0	0	13,190	2,630
	構成比	100.0	93.8	0.0	0.0	4.4	0.9
並行生産経営	羽数	593,560	252,560	297,900	0	33,100	10,000
	構成比	100.0	42.6	50.2	0.0	5.6	1.7

飼養形態別飼養羽数（ケージ）

- ケージのうち、バッテリーケージは93.9%、エンリッチャブルケージは3.8%、エンリッチドケージは0.4%
- 並行生産経営は、ケージ飼育の総羽数で33.9%でありながら、エンリッチャブルケージの43.9%、エンリッチドケージの17.0%
- エンリッチャブルケージとエンリッチドケージを合わせて、ケージ全体の4～5%の導入率

エンリッチドケージ：動物福祉に配慮した施設を含むケージシステム（EUの最低基準）
エンリッチャブルケージ：設備を付加すればエンリッチドケージに移行できる施設

飼養形態別飼養羽数（ケージ）

		合計	バッテリー	エンリッチャブル	エンリッチド
合計	羽数	27,365,240	25,699,450	1,048,090	98,800
	構成比	100.0	93.9	3.8	0.4
C経営	羽数	18,086,940	16,897,950	588,090	82,000
	構成比	100.0	93.4	3.3	0.5
並行生産経営	羽数	9,278,300	8,801,500	460,000	16,800
	構成比	100.0	94.9	5.0	0.2

鶏舎構造別飼養羽数（ケージフリー）

ケージフリーのうち、開放鶏舎は51.6%、セミウインドレスは5.8%、ウインドレスは37.1%

並行生産経営は、セミウインドレスの96.0%、ウインドレスの100.0%を占める
ウインドレス羽数は、エイビアイリーの羽数を上回る

CF経営は、87.4%が開放鶏舎であり、ウインドレス鶏舎は0.0%

- 開放鶏舎：窓があるなど自然の光や風を取り入れている
- セミウインドレス鶏舎：窓のない鶏舎だが、外から空気や日光を取り入れることができる
- ウインドレス鶏舎：窓のない閉鎖型鶏舎、換気や光量・温度を自由に調節できる

鶏舎構造別飼養羽数（ケージフリー）

		合計	開放鶏舎	セミウインドレス	ウインドレス
合計	羽数	896,410	462,650	52,410	332,400
	構成比	100.0	51.6	5.8	37.1
CF経営	羽数	302,850	264,750	2,110	0
	構成比	100.0	87.4	0.7	0.0
並行生産経営	羽数	593,560	197,900	50,300	332,400
	構成比	100.0	33.3	8.5	56.0

採卵鶏の在り方（自由回答）
CF経営：5千～1万羽
「ケージフリーでもウインドレス鶏舎での飼育では鶏の福祉にはならないと思います」

鶏舎構造別飼養羽数（ケージ）

ケージのうち、開放鶏舎は9.0%、セミウインドレスは9.8%、ウインドレスは71.3%

開放鶏舎・セミウインドレス鶏舎 それぞれ約1割（C経営、並行生産経営共通）

開放鶏舎：窓があるなど自然の光や風を取り入れている

セミウインドレス鶏舎：窓のない鶏舎だが、外から空気や日光を取り入れることができる

ウインドレス鶏舎：窓のない閉鎖型鶏舎、換気や光量・温度を自由に調節できる

鶏舎構造別飼養羽数（ケージ）

		合計	開放鶏舎	セミウインドレス	ウインドレス
合計	羽数	27,365,240	2,458,600	2,673,990	19,513,950
	構成比	100.0	9.0	9.8	71.3
C経営	羽数	18,086,940	1,557,600	1,956,990	13,613,350
	構成比	100.0	8.6	10.8	75.3
並行生産経営	羽数	9,278,300	901,000	717,000	5,900,600
	構成比	100.0	9.7	7.7	63.6

飼養方法別飼養スペース（ケージフリー）

鶏舎内

○CF経営における単層平飼い47経営、フリーレンジ4経営、オーガニック4経営

鶏舎内 1羽当り飼養スペースは、単層平飼い4,066.7cm²、フリーレンジ3,196.3cm²、オーガニック 3,671.7cm²

○並行生産経営における単層平飼い16経営、エイビアリー3経営、フリーレンジ3経営、オーガニック1経営

鶏舎内1羽当り飼養スペースは単層平飼い2,172.4cm²、エイビアリー1,111.0cm²、フリーレンジ2,236.1cm²、オーガニック 2,222.2cm²

鶏舎外

○CF経営 フリーレンジ8,980.0cm²
オーガニック 21,766.7cm²

○並行生産経営 フリーレンジ2,424.1cm²
オーガニック2,222.2cm²

○鶏舎内のスペースは、不明点は問い合わせで確認を行った
○鶏舎外の飼養スペースは、回答数が少ないことから参考

○鶏舎内スペースは、EU基準である1,111cm²を大きく上回る

1羽当り飼養スペース(ケージフリー) (cm²)

			単層平飼い	エイビアリー	フリーレンジ	オーガニック
鶏舎内	ケージフリー経営	回答数	40	0	4	3
		平均	4,066.7		3,196.3	3,671.7
	並行生産ケージフリー	回答数	16	3	2	1
		平均	2,172.4	1,111.0	2,236.1	2,222.2
鶏舎外	ケージフリー経営	回答数			4	3
		平均			8,980.0	21,766.7
	並行生産ケージフリー	回答数			3	1
		平均			2,424.1	2,222.2

* エイビアリー（コンビタイプ）の回答は無し

飼養方法別飼養スペース（ケージ）

- C経営におけるバタリーケージ 55経営、エンリッチャブルケージ 5経営、エンリッチドケージ 2経営
1羽当り飼養スペースは、バタリーケージ 448.9cm²、エンリッチャブルケージ 570.4cm²、エンリッチドケージ 2,063.5cm²
- 並行生産経営におけるバタリーケージ 20経営、エンリッチャブルケージ 5経営、エンリッチドケージ 1経営
1羽当り飼養スペースは、バタリーケージ 476.8cm²、エンリッチャブルケージ460.0cm²、エンリッチドケージ 回答無し

1羽当り飼養スペース(ケージ) (cm²)

		バタリーケー ジ	エンリッ チャブル ケージ	エンリッチ ドケージ
ケージ経営	回答数	43	4	2
	平均	448.9	570.4	2,063.5
並行生産ケー ジ	回答数	18	3	0
	平均	476.8	460.0	

飼養方法別飼養スペース（既存調査との比較）

採卵鶏飼養スペースの現状（1羽当り、2015畜産技術協会）

採卵鶏全体 430cm²未満47.6% 550cm²以上10.2% 平飼い飼育 550cm²未満が37.3%

○2025調査

ケージ飼育 430cm²以上経営構成 61.4% （畜技協調査で 52.4%ゆえ、約1割増加）
ケージフリー飼育 1000cm²以上経営構成比 100% （畜技協調査で 48.8%ゆえ、2倍以上に増加）

* 10年前の畜技協調査との比較：ケージ飼育の飼養スペースは緩やかな拡大
ケージフリー飼育の飼養スペースは大幅に改善

経営ごとの飼養スペースの分布（2025.2調査）

	ケージ		ケージフリー	
	件数	割合	件数	割合
370cm ² 未満	8	11%	0	0%
370～430cm ² 未満	19	27%	0	0%
430～490cm ² 未満	25	36%	0	0%
490～550cm ² 未満	6	9%	0	0%
550～1000cm ² 未満	10	14%	0	0%
1000cm ² 以上	2	3%	68	100%
合計	70	100%	68	100%

注：回答経営のみ

日本の採卵鶏1羽当り飼養スペース（2015畜産技術協会）

	ケージ飼い		平飼い	
	件数	割合	件数	割合
370cm ² 未満	37	8.8%	8	18.6%
370～430cm ² 未満	163	38.8%	2	4.7%
430～490cm ² 未満	130	31.0%	4	9.3%
490～550cm ² 未満	47	11.2%	2	4.7%
550cm ² 以上1000cm ² 未満	43	10.2%	6	14.0%
1000cm ² 以上			21	48.8%
合計	420	100.0%	43	100.0%

資料：畜産技術協会、採卵鶏の飼養実態アンケート調査報告書、2015.3
調査方法：2014.8アンケート発送。無回答を除く。

設置施設(鶏舎内外)

○ケージフリー経営

鶏舎内の設置している設備として、

巣箱
敷料
止まり木
飼料槽
給水器

等は概ね設置されている一方、

・砂浴びエリア
の設置は6割程度に留まる

・ついでみの材料
の設置は2～3割程度に留まる

鶏舎内／鶏舎外で設置しているもの（全て選択）

		ケージ経営		ケージフリー経営		並行生産経営	
		64	100.0%	53	100.0%	21	100.0%
鶏舎外	外敵から守るシェルター	0	0.0%	9	17.0%	1	4.8%
	日陰などを作る木など	1	1.6%	14	26.4%	1	4.8%
	水飲み場	0	0.0%	7	13.2%	1	4.8%
	屋根なし飼育場（ついでみ材料有）	0	0.0%	8	15.1%	1	4.8%
	屋根付き飼育場（敷料有）	0	0.0%	5	9.4%	2	9.5%
	屋根付き飼育場（ついでみ材料有）	0	0.0%	2	3.8%	0	0.0%
鶏舎内	その他	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
	巣箱	1	1.6%	51	96.2%	21	100.0%
	敷料	0	0.0%	45	84.9%	20	95.2%
	砂浴びエリア	0	0.0%	33	62.3%	12	57.1%
	止まり木	1	1.6%	51	96.2%	20	95.2%
	ついでみの材料	0	0.0%	18	34.0%	4	19.0%
	資料槽など	3	4.7%	44	83.0%	17	81.0%
	給水器など	4	6.3%	49	92.5%	20	95.2%
鶏舎内	爪とぎ	0	0.0%	6	11.3%	6	28.6%

注：設問はケージフリー飼育経営へのものとしたが、エンリッチド経営は設置があるため回答のあったものを記載

採卵鶏の品種と処置（既存調査）

○ケージフリー飼養技術の課題として、ツツキによる鶏の傷害などの課題がある

 ビークトリミングのケージフリーでの実施状況
 鶏舎の有効活用、雛代費用の軽減等を目的とする誘導換羽の実施状況

①日本養鶏協会アンケート（2025.3）
 誘導換羽実施（よく実施＋ときどき実施）45％
 「よく実施する」経営と「実施しない」経営で
 4年間平均151日の飼養期間の違い

②農水省「アニマルウェルフェアに関する飼養管理指針取組状況に係る調査」（2025.6）

- ・「ビークトリミングを行っている」22.5％、
 「その他（ビークトリミング実施済雛導入）」52.8％
- ・「換羽処理を行っている」はい54.7％

* ビークトリミング ②から生後すぐを含む75％が実施
* 換羽処理 ①②から45％～55％程度の経営が実施

誘導換羽を実施するか（日本養鶏協会2025.3 構成比）

	2022.3	2023.3	2024.3	2025.3
よく実施する	59%	50%	62%	37%
時々実施する	8%	17%	12%	9%
実施しない	33%	33%	26%	55%

資料：日本養鶏協会「鶏卵生産等のアンケート調査結果について」（各年版）。調査対象は鶏卵生産者経営安定対策事業加入生産者593～697名（回収率36～48％）。

誘導換羽実施の有無による成鶏飼養日数（日齢）（日本養鶏協会2025.3）

	2022.3	2023.3	2024.3	2025.3
よく実施する	713	710	711	696
時々実施する	648	655	665	680
実施しない	559	570	551	546

ビークトリミングの実施

○ケージフリーで、
 ビークトリミング実施していない
 合計 22経営 (29.7%)
 ビークトリミング実施している
 合計 37経営 (50.0%)

CFのみの経営 特に1羽当面積は広い
 (単層で4,066.7cm²/1羽)
 にも関わらず、ビークトリミング実施率 5 割

なおこの質問項目は、ケージフリー実施経営に
 向けたものであり、ケージ経営の回答数は少ない

ビークトリミングは生後何回実施していますか

	ケージ経営		ケージフリー経営		並行生産経営	
	64	100%	53	100%	21	100%
0回			17	32%	5	24%
1回	15	23%	22	42%	12	57%
2回	1	2%	2	4%	1	5%
3回						
4回						

生後150日以降のトリミングは行ってますか

はい	1	2%	2	4%
----	---	----	---	----

誘導換羽（強制換羽）の実施

○ケージフリー実施経営で誘導換羽を実施している経営 8.1%

○本調査では、飼養日数を聞いていない
誘導換羽がどの程度飼養日数を減少・増加させているかは不明

* ケージフリー経営向けの質問であったため、ケージ経営の回答数は少ない

強制換羽（誘導換羽）を行っていますか

	ケージ経営		ケージフリー経営		並行生産経営	
	64	100%	53	100%	21	100%
はい	14	22%	4	8%	2	10%
いいえ	6	9%	49	92%	19	90%

「はい」の場合、何日齢まで飼いますか

500日齢					1	5%
650日齢	2	3%	2	4%		
700日齢	8	13%				
750日齢	3	5%	1	2%	1	5%

ケージフリーの品種

飼養品種

ボリスブラウンが最も多く
ゴトウ鶏の品種が次いで多い

品種毎の羽数は聞いていない

ケージフリーの品種（回答経営数）

	合計	ケージフリー経営	並行生産経営
	74	53	21
ボリスブラウン	50	38	12
ゴトウモミジ、さくら、ゴトウ	26	17	9
岡崎おうはん・おうはん	7	5	2
アローカナ	4	4	0
シェーバーブラウン	3	1	2
ジュリアライト	2	1	1
烏骨鶏	2	2	0
ヒベコ・ネラ	2	2	0
ハイラインソニア	1	0	1
龍神コッコ	1	1	0
名古屋コーチン	1	1	0
あずさ	1	1	0
土佐ジロー	1	1	0

注1：C経営の回答は除いた

注2：無回答なし。3種と回答した経営1（CF）

注3：複数品種飼養経営も少なくない

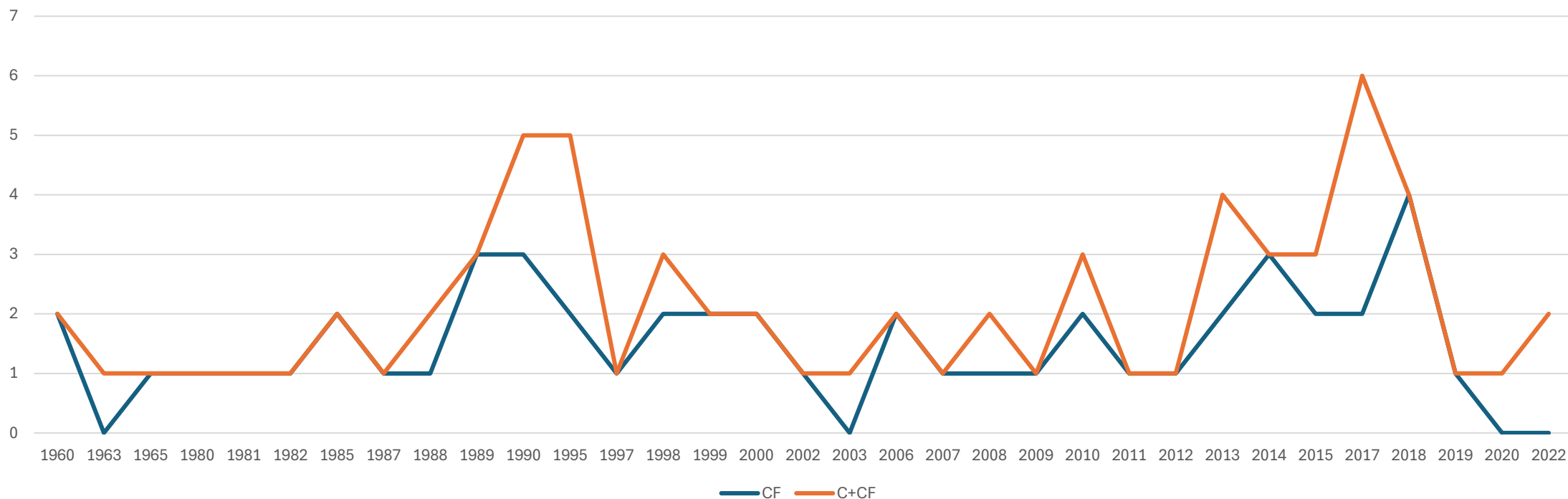
ケージフリー飼育の開始年

ケージフリー開始年 かなりのばらつき

CF1万羽以上経営に限定してみると、

1960年代：4、1980年代90年代：5、2000年代：3、2010年代：7と、2010年以降がやや多い傾向

ケージフリー開始年(経営数)



ケージフリーを始めた理由

○CF実施経営の共通で高い関心事項
「付加価値販売のため」

○CFのみの経営で高い
「鶏の健康増進のため」
「鶏の福祉のため」
「卵の栄養・おいしさ向上のため」
「鶏の免疫力向上のため」

○並行生産経営で高い
「社会・取引先のニーズ」
「卵・経営のイメージアップのため」
「世界の動向を見て」

* CFのみの経営と並行生産経営では
CF取組に契機・意識の違いが存在する

ケージフリーを始めた理由は何ですか（4つ選ぶ）

	CF経営	並行生産経営	CF5千羽以上
回答数	53	21	31
鶏の健康増進のため	60%	10%	32%
付加価値販売のため	58%	86%	65%
鶏の福祉のため	58%	24%	45%
卵の栄養・おいしさ向上のため	49%	19%	32%
鶏の免疫力向上のため	36%	10%	16%
社会・取引先のニーズ	26%	67%	52%
卵・経営のイメージアップのため	19%	62%	32%
労働力の有効活用のため	9%	5%	3%
世界の動向を見て	9%	33%	19%
鶏舎の有効活用のため	6%	19%	3%
その他（具体的に）	32%	33%	29%

CFの飼養方法を学んだ方法

独学が多い

実践しているCF経営への訪問なども半数近い

取引業者などのアドバイスは、並行生産経営にとって重要な情報源として機能

CFのみの経営は、事業上の関係者から得られる情報が不足する傾向

ケージフリーの飼養方法はどのようにして学びましたか(上位2つ選んでください)

	ケージフリー経営 53	並行生産経営 21
	100.0%	100.0%
独学（書籍、見学、検索など）	73.6%	81.0%
実践している経営者への訪問やインタビュー	41.5%	47.6%
かつてケージフリーをしていた方からの伝聞	17.0%	14.3%
取引業者（流通・資材等）などのアドバイス	9.4%	28.6%
その他（具体的に）	34.0%	19.0%

ケージフリーの技術的課題（自由回答）の特徴

CF実施経営を対象
選択肢にない項目を中心に整理

1 社会的な基盤整備の必要性

生産技術：高度、マニュアル作成しにくい、鶏に関する知識不足
雛や廃鶏：育雛業者が限定的、引退鶏の処理施設不足
消費者に伝わらない、消費者のリテラシー
平飼い経営が少なく優良技術を学びにくい、従業員教育

2 ケージフリー固有の技術課題の解決

飼養成績が悪い・産卵率・季節変動
生産性低下（労働、飼料、1羽当り、面積、1個当り重量）：1羽当りスペース増加
巢外卵・汚卵の扱い
飼育日数の減少（誘導換羽できない）
卵の安全確認方法
尻つつき・生存率悪化・圧死
作業環境悪化・掃除頻度増加、手間がかかる
敷料と日本の高温多湿
床面に鶏が接するリスク回避、鶏が平飼いに向いていない
緑餌確保、自家配合飼料

3 養鶏業の一般的課題の解決

ネズミ・けもの対策
鳥インフルエンザ
コクシジウム、マイコプラズマ、ワクモ

4 科学的・文化的な課題の検討

生食文化との相性

ケージフリーの技術的課題（自由回答） 並行生産経営

自由回答は必ずしも階層内規模順の並びではない。
羽数階層区分は、並行生産経営・CF経営・C経営
で異なる。
概ね全回答を記載。
また・が1経営の回答。
(以下、自由回答の記載は同様)

○CF5万羽以上

- ・労働力、清掃頻度、巢外卵の取り扱い
- ・敷料と日本の高温多湿、生食文化の相性が悪い点
- ・光線による尻つつき、鶏がシステム鶏舎用に育種改良され体重少なくなつた量を減らした為平飼いに向いてない
- ・生産性の低さ。労働者の作業環境の悪化

○CF1万羽以上～5万羽未満

- ・成績不良、巢外卵など
- ・単層平飼いでは巢外卵率の高いことが課題
- ・育雛業者に限られる、育成の良し悪しの判断材料少ない 巢外卵が多くなった場合の対応等、ノウハウが少ない
- ・巢外卵の低減、ツツキの予防
- ・巢外卵が多いので大変
- ・鶏の運動量多くなり飼料摂取量が増加し飼料効率が悪化。鶏同士の突き合いが発生しやすく生存率が低下。巣箱外への産卵した卵の管理、夏場・冬場の環境対応難しい

○CF 5千羽以上～1万羽未満

- ・つつきが多い
- ・コスト(初期投資)
- ・巢外卵をいかに減少させるか
- ・巢外卵の発生、生産性がケージより3割ほど落ちる

○CF 1千羽以上～5千羽未満

- ・巢外卵の多発、鶏同士のつつき、FCの悪さ、個卵重が小さい、生産コストがケージの3倍程度必要
- ・産卵率の向上、汚卵の発生増
- ・強換ができないので売り物になる卵を産める期間が短い
- ・販売と羽数調整がうまくいかない

○CF1千羽未満

- ・床面に鶏が接するリスクの回避、資材、発酵、衛生管理に気をつける。従業員の教育（鶏に対する意識の向上）
- ・手間がかかる

○1万羽以上

- ・こうすれば良いというマニュアルが作成しづらいこと。手間がかかるしコストもかかるがそれでうまくいくとは限らない
- ・産卵率の維持、尻つつき対策、ネズミ・けもの対策、鳥インフルエンザ対策、緑餌の確保、自家配合飼料の材料の確保
- ・飼養環境、圧死
- ・病気：コクシジウム、マイコプラズマ、尻つつき.産卵：巢外卵対策、ワクモ。
- ・鶏の様子を日々観察する。仲良く暮らせる鶏を育てる
- ・マニュアルが存在しない

○5千羽以上～1万羽未満

- ・平成元年創業時より平飼い養鶏を実施しているので大きな課題は都度解決してきた。課題としてはワクモ（吸血害虫）、鶏インフルエンザなどケージの抱える課題と共通
- ・ネストに卵を産ませる、餌の食べムラをなくす
- ・鶏病対策、鶏の状態の把握による飼育管理
- ・集卵、産卵成績の低下、防疫対策など
- ・動物福祉やオーガニックの考え方が浸透していない為付加価値販売（ブランディング）と継続的な購入層の獲得が難しい
- ・つつきによる死亡が多い減耗率が高い。採卵に手間がかかる。
- ・巢外卵を5%未満に抑える方法、地域の環境にもよるが敷料を乾燥した状態に保つこと

○1千羽以上～5千羽未満

- ・生き物相手なので思い通りに行かない。休めない
- ・飼料設計-大手の飼料会社によらない自家配合、安全安心なおいしい卵を作る為
- ・手間がかかる
- ・鶏同士のいじめによる死亡
- ・つつきの発生
- ・巢外卵の採取、洗卵、敷料の交換（入れ替え）
- ・飼養マニュアルの不在とあったとしても使用・運用に耐えないものが多い（大学や専門学校等で養鶏を教える課程がない）
- ・ビークトリミングをせずに尻ツツキを防止する
- ・夏場の暑さ対策、尻つつき
- ・環境の変化（特に夏の暑さ）に応じて鶏のストレスをいかに軽減するか。飼料代金の値上がりも含め継続のために付加価値をつける
- ・鶏舎の衛生管理
- ・尻つつき、機械化の限界があり体力負荷が大きい
- ・初生の1ヶ月目から成鶏とエサ同様にし腸の発達させ生命力と持続力を養う、丈夫な鶏から丈夫な卵。

○1千羽未満

- ・つつきによるへい死を完全には防げない、コクシジウム等、食糞による被害の助長を防ぐのは困難
- ・巢外卵、酷暑対策、尻つつきなどの悪癖、雄鶏の攻撃性
- ・冬場の床の湿気
- ・尻つつきによる死鳥、癖になると止まらない。脱腸、死に至る。
- ・床の環境維持、鶏舎が谷底で湿気りやすい為
- ・鶏卵の鮮度保持と産卵時間・出荷時間との関係に苦労
- ・鶏の幸せ度を見極める事
- ・機械化できると思うがやっていない。もっと効率的にできる
- ・野生動物の対策、産卵率の低下、鳥インフル対策
- ・養鶏業に特化した保険がない
- ・雪が多く増羽数をする際に強度のある鶏舎が必要。また排雪場所も考えて建物を建てる
- ・えさやりが手動で全て行う必要、また鶏舎の数が必要、ゆえに餌やりや採卵時の鶏舎間の移動が必要
- ・どの鶏が順調に産んでいてどの鶏が全く産めていないかなどわかりにくい（部屋が個々に分かれていない）
- ・グループ内ヒエラルキー最下位の鶏に対していじめが発生する
- ・敷料などの生育環境
- ・場所柄開放鶏舎にできない。対動物対策いちごっこ、鳥インフルエンザ
- ・1週間に1回、リヤカーで2km離れた全農青果センターまでおがくずを取りに行かなければならない
- ・エサの確保と配合、獣害から守る手立て

ケージフリーの技術的課題（選択肢）

○共通課題

「つつきやいじめの発現の多さ」
 「巢外卵の多さ」
 「汚卵の多さ」
 「敷料などの整備の大変さ」
 糞尿処理、病気発生リスク

○並行生産、CF5千羽以上層

「ケージフリー生産基準の定めない」
 死亡率の高さ

* 最多回答項目の違い

CF経営「つつきやいじめ」
 並行生産経営「巢外卵の多さ」

ケージフリーでの生産の技術的な課題は何ですか（主な4つ）

	CFのみ経営	並行生産経営	CF 5 千羽以上
回答数	53	21	31
つつきやいじめの発現の多さ	51%	43%	39%
巢外卵の多さ	42%	76%	74%
汚卵の多さ	38%	48%	29%
敷料などの整備の大変さ	34%	33%	32%
糞尿処理の大変さ	26%	29%	13%
コクシジウムをはじめとする病気発生リスク	25%	29%	32%
粉塵や鶏舎掃除の大変さ	21%	19%	16%
ワクモをはじめとする害虫リスク	17%	10%	13%
日本のケージフリー生産基準が公的に定められていないこと	15%	33%	35%
ケージフリー用に育雛する業者がみあたらない	8%	10%	13%
死亡率の高さ	6%	33%	23%
ケージ卵と区分して出荷までの作業をしなければならないこと	4%	10%	10%
その他（具体的に）	13%	19%	10%

* 3割を超える回答項目をハイライトしてある

1 社会基盤の整備

- ・エイビアリーには補助があるが単層平飼いには補助が出ない
- ・消費者意識調査では事実が見えてこない。消費者の意識、リテラシーの指摘
- ・敷料がないことでEU等と同じ基準を求められると販路を失いかねない

2 CF市場形成に関する課題

- ・CF関心企業増えたが価格はバッテリーと比較され、CFが適正では売れない。
CFのコストに見合う販売価格での販売量の限定性。販売先の確保、市場の狭さ。販売価格の高さ。
- ・ケージフリーがコモディティ化した。
全国流通によりケージフリーだけでは売れない、ブランド化が必要

3 CF固有の経営課題

- 1羽当り投資額が高い、初期投資
- 生産のコスト高、製品化率の低さ、生産性の低さ（1羽当り）
- 管理運営のコスト高
- 労働環境の悪化、労働生産性の低さ、労働力の増加
- サルモネラ等の危機管理

ケージフリーの経営的課題（自由回答） 並行生産

○CF5万羽以上

- ・生産した卵の全量が全てCF卵として販売できるわけではない。消費者インタビュー調査ではきれいな事がはびこり事実が見えてこないこと。需要があるはずなのに実際は売れない（相場に左右される）
- ・敷料がないことでEU、米国と同等の生産基準を求められると販路を失いかねない事
- ・産卵率（死亡率の高さからも）

○CF1万羽以上～5万羽未満

- ・コスト高の為どうしても高い卵になってしまう
- ・製品化率を上げる、コストに見合った販売が出来る
- ・ケージフリーに関心がある企業は増えてきたものの、価格については従来のバタリーとの比較になるケースがほとんど。安価で取引したい気持ちはもちろん理解できるが、ケージフリーの内容よりも、「ケージフリーエッグ使用」という言葉を使用したいがための関心が多い。まだまだ“適正価格”で売れる気はしない
- ・ケージフリー平飼い卵が全国で流通するようになりケージフリーだけでは優位性がだせなくなってきた（コモディティ化）
- ・1羽当たり投資が高く生産を増やせない（システム代高い）
- ・飼養成績がケージに比べて低い。管理運営にかかるランニングコストが高い。卵の販売先は限定的（適正価格での）

○CF 5千羽以上～1万羽未満

- ・販売先の確保、非常にタイトな市場なので拡大等が困難
- ・全ての生産卵がケージフリーとして販売できていない

○CF 1千羽以上～5千羽未満

- ・生産コストの高さ＝生産性の低さ＋飼養管理の手間
- ・サルモネラ等の危機管理
- ・売り物になるような卵がとれる期間が短い
- ・販売単価

○CF1千羽未満

- ・飼養管理、鶏の知識不足、販売先確保が苦勞する
- ・コスト増

ケージフリーの経営的課題（自由回答） C F 経営 1

○1万羽以上

- ・販売先の確保（コストに見合う出荷先は多いわけではない）
- ・卵の生産量を安定確保、それに対応した販路確保
- ・鶏舎が多く必要になる
- ・販売価額、販売先、経費多い
- ・集卵を含め人手がかかる
- ・鶏を見てもらい知ってもらって卵を食べてもらう
- ・販売価格が安い
- ・鶏の飼育スペースに限度がある＋従業員の数が必要な為、卵価を高く設定する必要がある

○5千羽以上～1万羽未満

- ・BtoBよりもBtoCを意識して経営しており、卸も卸担当者と直接やりとりしているので課題はないが、ここ数年で始めた場合の課題を仮定するならばブランド化と思う
- ・消費者にケージフリーなかなか伝わらない。産卵された卵の安全性の確認方法（機械に費用がかかりすぎる為、小羽数では設定しづらい）
- ・コストを価格に反映できない事
- ・消費者のリテラシーの向上
- ・ケージフリー以外にも特色があると差別化しやすい（飼料、運動場、育雛、育成など）
- ・最終顧客へ販売価格（なぜ高いのか）への理解を深めること

○1千羽以上～5千羽未満

- ・エサや資材の高騰
- ・安定的な生産と単価に見合った販路の開拓
- ・エイビアリー方式には建設補助はあるが本来の平飼い鶏舎にはない
- ・平飼い飼育であっても消費者が飼育環境の違いを明確にわかるようにすることが必要
- ・手間がケージの何倍もかかる
- ・鶏舎内で集団で飼育している為、鶏の強弱がでてしまうことがあり、つつきやいじめが発現してしまう。鶏糞処理のコンベア等が無い為、鶏舎の大きさにもよるが廃鶏後の鶏糞処理を手作業になるので大変になる
- ・人員確保、ケージ飼いに比べ人手がかかるが販売価格に反映できるわけでもない
- ・卵価が高いため生卵の製品として販売するのが難しいため他の小売業者へ卸売りし販売する業者がほとんどいない。ネット販売で数量をコントロールして販売する必要がある。
- ・薄利多売の代名詞である鶏卵業界においてケージ飼いとの差別化、ブランド構築の工夫。BtoBからBtoCへのシフト、それに関わる労力
- ・特にない
- ・野菜と同様価格転嫁がしにくい点とスーパーの値段が標準のため購入をためらう方が多い。良いとわかっているのと買えるは別
- ・季節変動による産卵数の不安定さ
- ・アニマルウェルフェア・ウオッシュ、フードファディズム
- ・営利計算を除外して鶏に合わせる、生んでくれた卵は高値で販売、恵の宝です

ケージフリーの経営的課題（自由回答） C F 経営 2

○1千羽未満

- ・価格の高さは、飼料効率が低く産卵率も低く規格外も多い等理由があることを消費者は理解してくれない。そもそも卵価の認識が間違っている
- ・販路（常に新規取引先を探し複数出荷する点など）、労働環境（ホコリ舞う、鶏に蹴られる、ワクモなど衛生・安全面など）
- ・ヘルパーなどに明日から旅行行くのでお願いしますと頼めない。高度な技術を要する。起業してから7年休みなし。
- ・販路の確保、餌代などの生産コストの高騰
- ・SS級のため適当な鶏卵パックがないので他の容器で対応しなければならずコストが高くなる
- ・長期的なお客様との信頼関係をつくり続ける事
- ・野生動物、特にテン、狐等の被害対策
- ・引退鶏の処理をしてくれる施設が少ない
- ・規格外やひび割れ卵の処理
- ・平飼い養鶏をしている農家が全国的に少ないので平飼い養鶏の技術を持っている優秀な農家が少ない。また農業改良普及センターなどにもノウハウがない。初生ビナを育てるノウハウを持っている農家がとても少ない。
- ・相場を考慮した卵価の決定、労力のみでいえばもっと価格を上げたいが世の中のケージ卵を基準にした標準価格があるゆえ簡単に値上げが難しい
- ・消費者のケージフリーへの関心が薄いので「ケージフリー」という付加価値をなかなか認めてもらえない（認めてくれる人数が海外に比べてまだ少ない）ので販売力、アピール力がないと難しい。
- ・生産コストを販売単価に反映しづらい点
- ・卵のロス
- ・緑餌の確保、魚粉の値上がり
- ・スムーズな廃鶏の処理、季節により産卵率の変化が激しいので小単位での入れ換えローテーションが必要.近所へのホコリや鳴き声の心配

ケージフリーの経営的課題（選択肢）

CFのみ経営「販売価格」「販売先の開拓」が6割超

並行生産経営：上記2項目はいずれも2割ほど回答率低下

ただし、CF 5千羽以上経営では、CFのみ経営と同様の傾向

○CFの販売価格、販売先の開拓は重大な問題

並行生産経営：「産卵率の低さ」「飼料効率の低下」「設備投資償却の大きさ」

⇒CFの生産性、投資負担が課題として大きい

技術的研究課題として、産卵率の低さ、飼料効率低下への改善方法も重要

ケージフリー生産の「経営」的な課題は何ですか（主な課題5つ）

	CFのみの 経営	並行生産 経営	CF5千羽 以上経営
回答数	53	21	31
販売価格	74%	48%	71%
販売先の開拓	60%	38%	61%
ケージフリー生産による労働時間の増加	47%	48%	48%
産卵率の低さ	28%	48%	32%
ケージフリー生産による1羽当たりの飼料効率の低下	26%	43%	29%
ケージフリーだけでは付加価値がつきにくいこと	23%	24%	29%
ケージフリーのための設備投資の償却費用の大きさ	17%	33%	29%
加工向け販売に際して、ケージと同価格での取引となりがち	15%	19%	23%
ケージフリー生産による労働環境の悪化	11%	10%	3%
テーブルエッグとして販売する際の卸・小売の取引条件が厳しい	9%	14%	13%
ケージフリー卵として販売できる割合の少なさ	6%	29%	13%
商品化率の低さ	6%	24%	6%
その他	19%	14%	6%

採卵養鶏のあり方（選択肢）

採卵養鶏のあり方に関し、「バタリーケージ生産を基本とすべき」は、ケージ経営66%、並行生産経営48%、CF5千羽以上39%と高い回答率。
CF生産経営も、比較的大きくCFを飼育する経営は、バタリーケージが良いと考えている

他方、CFのみ経営では、「ケージフリー生産を基本とすべき」34%、「ケージを基本とすべき（バタリー+エンリッチド）」11%と意識に違い。

「1羽当たり最低面積基準を設けるべき（屋内）」

⇒ C経営25%、CF経営55%、並行経営52%

CF5千羽以上経営で45%、最低面積基準設定は論点。

「開放鶏舎を基本とすべき」

⇒ CF経営34%、C経営11%、並行生産14%、CF5千羽以上で13%とおしなべて低く、開放鶏舎のリスクに関わる技術研究も不可欠。

採卵養鶏のあり方に関して、米国では州によってケージフリーを最低基準としている州がありますが、日本ではケージフリーを最低基準とすることについてどのようにお考えですか（賛成する意見にすべて○を付けてください）

	ケージのみ経営	CFのみ経営	並行生産経営	CF5千羽以上経営
回答数	64	53	21	31
バタリーケージ生産を基本とすべき	66%	9%	48%	39%
ウインドレス（セミウインドレス）鶏舎を基本とすべき	25%	2%	19%	10%
1羽当たり最低面積基準を設けるべき（屋内）	25%	55%	52%	45%
開放鶏舎を基本とすべき	11%	34%	14%	13%
エンリッチドケージを基本とすべき	8%	2%	0%	3%
1羽当たり最低面積基準を設けるべき（屋外）	5%	25%	10%	13%
ケージフリーを最低基準とすべき	2%	26%	0%	13%
コンビタイプエイビアリーはケージに区分すべき	2%	11%	33%	29%
止まり木や巣箱などの付帯設備を設置することを基本とすべき	0%	36%	10%	16%
ケージフリー生産を基本とすべき	0%	34%	0%	13%
エンリッチドケージを最低基準とすべき	0%	2%	0%	0%
その他（ ）	6%	8%	19%	13%

採卵養鶏のあり方（自由回答） 特徴

自由回答は必ずしも階層内規模順の並びではない。
羽数階層区分は、並行生産経営・CF経営・C経営
で異なる。
概ね全回答を記載。
・が1経営の回答。

- 1 ケージが優れた飼養方法（バタリーケージが管理面・コスト面・衛生面で優れていて合理的）、C F への強い忌避感
- 2 採卵鶏は人の為に存在する経済動物、家畜はどんな飼い方をしても良く制限の必要なし。1羽430cm²の基準もない方がよい
- 3 科学的根拠提示の必要性
「日本オリジナル」「日本にあった独自のルール」
「ケージフリーは採卵養鶏の逆戻り」「システムを逆戻りさせるべきでない」「生食文化ゆえC F は辞めた方がよい」
「国土の狭い日本でケージフリー最低基準は難しい」「抗生物質利用はやめるべき」
- 4 C・CF共通の在り方の提起
鶏にストレスがかかると産卵成績が下がるので産卵成績基準を設け、それをクリアすれば良い環境だと判断する
最低面積基準は鶏舎構造、鶏種（鶏の体重等）を基本的に設定すべき 食の安全を第一に
- 5 CとCFの共存の指摘（CF、並行生産）
- 6 よりAWを強化した飼養法の指摘
1羽当たりの面積が最低550cm²が必要、ウインドレスではケージフリーの意味はない、C F は廃鶏後の利用率高まる
- 7 透明性のある情報発信の必要性や消費者の信頼度の低さの指摘

採卵養鶏のあり方（自由回答）並行生産経営

○CF5万羽以上

- ・ バタリー、エンリッチ、エイビアリー、それぞれのルール基準は作るべき
- ・ 日本の場合には消費のそれぞれのニーズに合わせた生産方式をとるべき。生産と販売側が決めて押しつけるべきではない。

○CF1万羽以上～5万羽未満

- ・ バタリーケージを反対することではない。平飼いの基準（ルール）を明確にすべきである（日本基準）
- ・ 生産者としてはケージフリーの方が良いが、実際には限られた国土で国内生産でまかなうこと、TKGやすき焼きなどの日本特有の生食文化や卵の消費量を考えるとバタリーケージを無くすことは難しい。アニマルウェルフェアの考え方も大切ですが、ケージフリーを推し進めると卵と日本の食文化がくずれてしまうとも。ケージフリーとバタリーの違いの認識がもっと広まって、一般の人がきちんとした選択ができる状態が理想です。健康的に育てた鶏が産んだ卵を望む方も、たくさん食べたいから卵は1円でも安い方が良いという方も、どちらも卵を楽しんでもらえるのは日本ならではの。
- ・ 消費者ニーズあつての生産と考えている為、ニーズに対し過度に先行してケージフリーを進めることは賛成出来ない
- ・ 地域にあった飼養管理、取引先が納得できる飼養管理

○CF 5千羽以上～1万羽未満

- ・ 大規模養鶏による大量生産が日本の主流でありケージフリーはハードルが高い
- ・ 日本は急な変化をよしとしないのでかなり先のゴールを定めていくのが良い
- ・ 開放式とウインドレス式やケージ飼いとケージフリーといった違いによる多様性を認め合える業界にしていくべき

○CF 1千羽以上～5千羽未満

- ・ 動物福祉を否定しないがサルモネラ菌などの危険を意識して現在のケージ生産は卵とフンをなるべく隔離して安全性を確保してきた。生食文化の卵かけご飯安心して食べられるのは代表的な例だと思う。
- ・ 野菜などの生産方法は自由かつ多様なのに採卵鶏はこうあるべきと言う基準を設けるのは乱暴な気がする。各生産者が備えている設備や飼育している気候、土地のサイズ、周辺住民の理解なども異なるので各生産者に在り方は委ねるべき
- ・ ケージフリーにすると日本の量が足りなくなるので一部でいいと思う

○CF1千羽未満

- ・ 消費者に識別していただくマークをラベルにつけるなどの生産方法の違いを伝え生産基準を確立する等の段階的、消費者の意識を向上していくなどの取り組みが必要
- ・ 鳥インフルエンザ発生において全群淘汰はやり過ぎの状況があるのにアニマルウェルフェアを論ずる事は片手落ち

採卵養鶏のあり方（自由回答）CF経営

○1万羽以上

- ・ケージフリーは販売価格が高めだが世の中の傾向として物価高ニュースなどで必ず卵の話が出る。今の日本においてコスト分を支払ってまで鶏のアニマルウェルフェアに寄与しようという人は少ない。ケージフリーについても鶏が幸せかということより、生産された卵を食べたら自分にどんないいことがあるかを考えている消費者が多い
- ・鶏舎の床を土間、適度の日光浴、緑餌不可欠
- ・物価の優等生から脱却すべき。5年周期の卵価からの価額の見直し
- ・卵がどのように出来ているか知ってもらった上でどのような環境で育った鶏がいいのか？食べる一人一人が考え選んでいけばいい。
- ・ケージフリーについては社会的意義が強く消費者全員に受け入れてもらう必要はない。タンパク源として安価なラインでケージフリーは必要。
- ・開放平飼い鶏舎だが他農場の（最低基準は）意見は述べない

○5千羽以上～1万羽未満

- ・日本独自に進めてきた養鶏のスタイルを欧米が進めているからと推進していくのは違う。日本のマーケット・顧客が本当に必要としているのか、という点からスタートしても良い。
- ・販売以外を考えて鶏の状態等を中心に考え生産する事ができれば良い。現在飼料単価を中心に考えないと飼育生産ができない点が難しい。
- ・EU諸国の基準にならいケージフリーの中でも明確にランク付けして飼育環境をわかりやすくし消費者リテラシーを上げるべき
- ・ケージフリーであってもウインドレス鶏舎での飼育では鶏の福祉にはならない。ケージフリーかつ開放鶏舎での飼育が望ましい
- ・ケージ飼育について飼養方法に否定はありません。安価で経済的負担なく消費者へ届いているのも事実。ただ消費者が少しでも理解を深め選択して購入できる様にPRをしていきます

○1千羽以上～5千羽未満

- ・卵の消費量世界2位、資源のない日本にとって卵は安価なタンパク源。今の消費量を平飼いにするのは現実的に難しい。その中でも良質の卵へ元気な鶏からは元気な卵が生まれる一を作る為にも平飼い養鶏の位置づけは消費者ニーズにとっても重要
- ・日本国内では現実的にはすべてをケージフリーにすることは難しいから最低でもエンリッチドケージが望ましい
- ・ストレスなく飼育し産卵させる
- ・ケージフリーにより鶏のストレスフリーにつながり廃鶏後の肉にできる率が高くなる。病気が少ない。
- ・餌の1/2が卵に反映されるともいわれているなら飼育方法に加えて餌の基準を見直すべき、抗生物質（大半が使用中）投与はすぐにでもやめるべき
- ・採卵養鶏の在り方は自由でいい。国土面積の問題や新規鶏舎建築の困難性、病気に対する的確な対応などなど、どの養鶏手法も一長一短。多様性がなければ様々な問題に直面した時、不都合が大きい。
- ・日本の国土面積、人口、飼料自給率を考えるとケージとケージフリーのハイブリッドが現実的
- ・自家配合を基本としてそれを発酵させて与える
- ・鶏の食べる餌の品質が良くなること。遺伝子組み換えでない国産の物を使う
- ・産卵率の低い鶏種の作出、高産卵率を求めることを控える
- ・太陽の下でのびのび過ごすのが良い卵。健康な鶏に値する。鶏の気持ちになってみる

採卵養鶏のあり方（自由回答）CF経営2

○1千羽未満

- ・ケージも平飼いも養鶏産業を支える為に必要。それ以上に透明性のある情報発信が必要。
- ・消費者は台風などの停電、銅線の盗難などでケージ飼育鶏が多く死んでいる現実を知らない。自然と調和した森林放牧が鶏にとって一番最適。生産性や経済合理性を一旦度外視して鶏ファーストであるのが前提
- ・自然養鶏（動物福祉に対応した形）を基準とすべき
- ・有畜農業を基本とすべき
- ・自然の生態系の中での人間であり鶏であるので可能な限り自然に近い環境で飼育管理するのが良い
- ・鳥インフルが発生した時の対処法、全羽殺処分は反対
- ・ケージフリーを基本とすることには大反対。生産者が決めるのではなく消費者が決めるべき。ニーズがあれば続くしニーズがなければ淘汰されていく。豚も牛も様々な種類、餌、地域があっている。選択肢は必要。
- ・鶏は犬や猫と同じ心や知能を持った動物。大事に飼ってあげないといけません。人間は鶏に食べさせていただいている。乱暴に扱うから鳥インフルエンザが猛威を振るう。人から人への感染症になる前に手を打たなければなりません。
- ・もっと消費者に情報開示をするべき。ただでさえ一般消費者に誤解を招く売られ方（黄身の色が濃い方がおいしそうなど）をされており、知識の共有をし、消費者自身が明確に選択できるようにありたい。そして昔のように身近にいる存在の延長線上に採卵養鶏があるようにしたい。
- ・今住んでいる地区の保健所は野外での飼育禁止といわれています。しかし他県などでは屋外でやっている養鶏農家は沢山います。うちも日光の当たる屋外で飼いたいのにと悔しい
- ・食料の安定供給が第一で鶏の福祉ができる経営体がやればいい。なんでも外国基準にしないでいい

採卵養鶏のあり方（自由回答）C経営

○50万羽以上

- ・バタリーケージによる値頃感のある卵の大量生産。平飼いなどの一部のアニマルウェルフェアの要望に合わせた卵。上記ニーズに合わせ共存が望ましい。

○10万羽以上～50万羽未満

- ・現状維持
- ・それぞれメリットデメリットがあると思うので農家で違って良い
- ・鶏にストレスがかかると産卵成績が下がるので産卵成績の基準を設けてそれをクリアしていれば良い環境だと判断すれば良い。バタリーケージが管理面でもコスト面でも衛生面でも優れていて合理的である。ここまで先人が磨き上げてくれたシステムを逆戻りすべきではない。採卵鶏は人の為に存在する経済動物である。
- ・そもそも家畜のためどんな飼い方をしても良い
- ・1羽当たりの面積が最低550cm²が必要
- ・鶏舎更新に国がお金を出してくれると良い
- ・飼養面積の面で国土の狭い日本ではケージフリーを最低基準にすることは難しい
- ・飼養方法は生産者が決めるべき
- ・もし国がケージフリーを求めるのであればケージ更新の為に必要な莫大な設備費用の融通をすべき。それらを生産者に押しつけるのであれば廃業せざるを得ない
- ・制限の必要なし
- ・最低面積基準は鶏舎構造、鶏種（鶏の体重等）を基本的に設定すべき

○1万羽以上～10万羽未満

- ・1羽当たり430cm²の基準もない方がよい
- ・アニマルウェルフェアケージは生産効率が悪くなっている、死亡率が高かったり事故が多い
- ・アニマルウェルフェアは理解できるがケージフリーもリスクはある。ケージでも愛情を持ってストレスなく育てている
- ・卵価
- ・日本は生食が多く食品衛生上問題になる
- ・他国の意見を参考にしつつ日本にあった独自ルールを作る
- ・様々なやり方があっても良いが食の安全とビジネスとしての継続が成り立つ形でないとならない
- ・ケージフリーにして鶏は死亡リスクが上がり人は手間／コストが上がる。誰が幸せになるのか。ケージフリー＝アニマルウェルフェアは疑問。

○1万羽未満

- ・日本は生食文化があるので欧米の基準に合わせるのではなく衛生面で高いクオリティを保っているところをアピールすべき
- ・現状のまま単価が2倍以上になることを消費者が理解するか
- ・アニマルウェルフェアの考えが偏っている。声の大きな人間の立場からの話し。ペットを家畜と分けて考えるべきで家禽は食の安全性を第一に考えるべき。

卵殻印字への意見（選択肢）

- ・ 卵殻印字はEUで義務化
 オーガニック：0、フリーレンジ：1、バーン（平飼い）：2、ケージ（エンリッチド）：3
- ・ 韓国・台湾でも義務化
 メリット 表示の信頼性、飼養方法の証明が鶏卵1つずつで実現する
 これにより消費者のAWへの認知が進む効果が期待

EU：欧州委員会はラベル表示を消費者に高品質な情報提供の中心的手段として位置付けている。義務付けられたラベル表示は、すべての製品がラベル表示されることを保証し、動物福祉で良好な成績を上げた製品のみがラベル表示されるという自主的ラベルの重要な欠点を補う。義務付けられた表示は政府による規制を伴い、消費者は民間認証機関よりも信頼できると認識する（Eurogroup for animals, Animal Welfare and Food Labeling, 2020）

C経営もCF経営も並行生産経営も

「飼養方法の印字義務化に否定的」
（「義務化しない方が良い」「義務化すべきでない」）な意見が多数

⇒飼養方法明確化が必要な状況にない

飼養方法（数字でケージフリー・ケージ等）を卵殻に印字する方法は、ヨーロッパや韓国・台湾で法的に導入され、消費者のケージフリー認知を高める効果が高いという意見があります。あなたの意見に○をつけて下さい。

	Cのみ経営	CFのみ経営	並行生産経営	CF5千羽以上経営
回答数	64	53	21	31
卵殻印字を義務化すべきだと思う	0%	4%	0%	3%
卵殻印字を義務化しても良い	11%	13%	10%	16%
特に意見はない	36%	49%	43%	42%
卵殻印字を義務化しない方が良い	20%	15%	24%	19%
卵殻印字を義務化すべきでない	25%	19%	24%	23%

卵殻印字への意見（自由回答） 特徴

C 経営

- ・コスト問題
- ・消費者が決めれば良い
- ・鶏卵の品質に飼育方法は基本的に関係ないため印字は必要ない
- ・動物福祉と動物愛護は別物

C F 経営

- ・何のための印字がよくわからない
- ・コストアップ
- ・ケージと同じような密度での平飼いも存在するのでケージフリーという言葉での訴求は一概に良いとはいえない
- ・直接販売のため不要

並行経営

- ・偽装が簡単にできる
- ・生で食べるものにインク表示はしたくない
- ・英国でもオープンマーケットでは印字なしがある

自由回答は必ずしも階層内規模順の並びではない。
羽数階層区分は、並行生産経営・CF経営・C経営
で異なる。
概ね全回答を記載。
・が1経営の回答。

卵殻印字への意見（自由回答）並行生産経営

○CF5万羽以上

- ・卵を洗う日本では印字はGPでの作業となります、偽装が簡単にできてしまう、印字は農場でしなければ意味がない
- ・生で食べるものにインク表示はしたくない、食品用インクや印字機は高くAW力の高い農家は対応できない。うちは対応できるが義務化には反対
- ・設備投資を養鶏場が負担することにより参入が難しくなる

○CF1万羽以上～5万羽未満

- ・卵殻印字にこだわるのは不安、卵の飼育方法による違いは卵殻以外にも卵表示可能
- ・生産管理のコストが発生することで少し高くならざるを得ないと思うと、全てではなく、ケージフリーのみ印字とかのほうがの方が消費者の分かりやすさがある
- ・印字の為の設備投資に小規模生産者が対応できるかという問題はあるが、消費者が購入する上での情報が増えることは賛成

○CF 5千羽以上～1万羽未満

- ・パック表示でも認知は進むのではないか
- ・印字を義務化すると小規模な生産者が対応できなくなる。弊社は卵殻印字を行っているが機械やインクは高額

○CF 1千羽以上～5千羽未満

- ・2013年頃イギリスに住んでいたがオープンマーケットのケージフリーの卵に印字はされていなかった。印字を義務化したとき専門の機械を導入すると、労働力の確保や機械の購入費などの負担が多くなる、500ー1000羽などの超小規模養鶏農家など対応できない
- ・コストが高くなりすぎる

○CF1千羽未満

- ・ケージフリーを始める生産者は新規／小規模事業者かもしれないが、卵殻印字の義務化は初めて聞いたがコストが大きく感じ、施行の移行期間を長期に設ける対策が必要
- ・コスト増

卵殻印字（自由回答）CF経営

○1万羽以上
なし

○5千羽以上～1万羽未満

- ・何のための印字かわからない、手段と目的を見失っている
- ・コストがかかりすぎる
- ・コストがかかりすぎる
- ・費用負担が生じる
- ・印字があったにしても消費者が本当に理解しているか疑問

○1千羽以上～5千羽

- ・印字するコストと手間がかかり必要ない。印字しなくてもPOPや卵の内外のラベルで明記するので必要ない
- ・平飼い飼育をしている経営体は家族経営、小規模経営が大半だと考えられますので設備投資が大変です。パックなどの別の方法であれば
- ・印字は差別化に必要だが機械を導入するのにかかるコストが気になる
- ・いたずらに生産者へ設備投資を求めないで欲しい。日付を変えるのはいくらでも可能だし、そもそも飼育方法や設備によって賞味期限はバラバラであることはどの業界でも認められている。その基準があるのは最も効率がいいが、現状のように数日遅い卵が買い控えるような風潮を助長するようなもの。
- ・生産者の負担が増えないのであれば導入しても良いかと思う
- ・卵殻印字自体が大量生産を前提にしているように思える、故に反対。付加価値に値するストーリーがあれば高く売れるし必要性が生まれる

○1千羽未満

- ・印字マシンの規格以外の商品（通常パック以外の包装）もあるので義務化は反対。印字自体は反対しない
- ・ケージと同じような密度での平飼いも存在するので「ケージフリー」という言葉での訴求は一概に良いとはいえない
- ・ばら売りだったらエシカルだし良い。元々プラパックは使ってなくてモールドパック（再生紙）そのパッケージデザインで認知できれば
- ・平飼い養鶏をしている小規模農家には負担が大きい
- ・消費者への直接販売をしている為全く必要は無い
- ・卵は呼吸しているので殻に付着するものはつけない方が良い
- ・卵殻印字にとっても労働時間がかかるようなら自分の農場ではできるかどうか考える必要がある
- ・義務化しても構わないが機械導入費は個人農家には厳しい
- ・卵の殻に印字されるのは料理に使う側としては少し気持ち悪いのでパック標記でよい。
- ・必要性を感じない
- ・コストの問題
- ・卵ケースに飼養方法が明記できるのでそれで良い

卵殻印字（自由回答）C経営

○50万羽以上

- ・日本にはない印字のやり方なのでその分のコスト増加を吸収できればいい

○10万羽以上～50万羽未満

- ・自由主義経済の下経営にメリットがあると判断した人だけが実施すれば良い。そもそもケージフリー認知を法律で後押しすること自体が疑問。日本は社会主義国ではない。
- ・パック等の賞味期限表示で充分
- ・飼養方法は好みや効率でしかない、大事なものは食品としての安全
- ・ケージフリー卵が全ての面で優れているとの誤解に繋がる
- ・印字しても良いがその為のコストは消費者持ってくれますか
- ・差別化で印字するのは自由
- ・多分日本では理解があまりされない。それより今まで通りの品質なら値段が強い。ケージフリーと印字されている2倍以上の卵と普通の値段の卵なら90%位の人が安い普通の卵を買う
- ・鶏卵の品質等について飼育方式は基本的に関係ないため卵殻印字は必要ないし無駄なコスト。パッケージへの表示で十分。

○1万羽以上～10万羽未満

- ・設備等の問題、経費が増える
- ・印字のマシンも高額なので義務化は絶対に良くない
- ・消費者が決めること
- ・卵殻印字コストの問題
- ・システム導入など全て強制すべきでない
- ・生食をしない地域で始まった考え方ですからなくてもよい
- ・印字する設備の導入に費用がかかる為、各自の判断で良い
- ・ケージフリー＝善ということではない。このようなことを義務化して何がしたいのか。それよりも動物愛護と動物福祉が別物であることを一般消費者に説明し浸透させてほしい。消費者に認知させてケージフリーのデメリット、ケージのメリットデメリットも示して選ばせるべき

○1万羽未満

- ・機械導入が必要になる
- ・ケージフリーだから「何？」消費者に安全性を訴えるものではない。生産者は全てが残酷でない。むしろ愛を持っている。

今後ケージフリーを増やしたいか（選択肢）

ケージフリーを拡大したい：前向きな回答（「そう思う」「少しそう思う」）
CF経営と並行生産経営 併せて56経営、76% ⇒ CFの拡大意欲は強い

養鶏協会アンケート（「鶏卵生産等のアンケート調査結果について」2025.3、6 全体の飼養羽数の増減予定）
「増やす」 ⇒ 8%～13%

＊採卵鶏全体の羽数拡大意欲(養鶏協会調査) に比較して、ケージフリーの拡大意欲(本調査)は旺盛

今後の養鶏業の取り組み方について

今後ケージフリーを増やしたいと思いますか（1つだけ）

	ケージ経営	ケージフ リー経営	並行生産経 営	CF5千羽以 上	CF1万羽以 上
回答数	64	53	21	31	19
そう思う	6%	60%	33%	48%	63%
少しそう思う	11%	19%	33%	26%	21%
あまりそう思わない	36%	6%	19%	16%	11%
そう思わない	44%	13%	14%	10%	5%

全体の飼養羽数の増減予定（2025.3養鶏協会調査、R7年分の予定）					
	全体	5万羽未満	5-10万羽	10-50万羽	50万羽以上
増やす	8%	8%	8%	8%	13%
現状維持	83%	75%	84%	89%	83%
減らす	9%	17%	8%	3%	3%

今後ケージフリーを増やしたいと思いますか（自由回答） 並行生産（背景黄色 前向き回答）

○CF5万羽以上

- ・消費者本位であるべきです
- ・ユーザーからの要望が多い
- ・消費者ニーズ、販売ニーズは増えている

○CF1万羽以上～5万羽未満

- ・日本の先進性を確保する為
- ・現在、販路の拡大に伴い少しずつ拡大中である
- ・国内でケージフリーがメジャーになる感じはまだ無いとはいえず、それでも少しずつニーズは増えている実感があるので増やしたいが、コストや育雛の問題もある
- ・販路が確保できれば増羽も検討したい
- ・ケージフリーの卵の引き合いが強い
- ・ストレス緩和になっているか疑問だ
- ・一般消費者への販売は難しい。生産コストが高い。労働力不足。鶏卵相場に左右される場合がある

○CF 5千羽以上～1万羽未満

- ・平飼い卵として完全にさばき切れていない現状
- ・現在規模拡大を考えていない
- ・持続可能な経営に資する生産／販売の仕組みが完成すれば独自性を伸ばす為に増やしていきたい

○CF 1千羽以上～5千羽未満

- ・販売量に限界がある
- ・労力が増える、卵が汚い、イメージ先行で食の安全を考えると(生卵を食べたいなら)あまり増やしたくない
- ・収益性を考えると増やしたいが消費者の物価高や可処分所得が少ない現状では難しいと思う
- ・いろんな人が居るので要望に応える為

○CF1千羽未満

- ・今年現在、平飼い鶏舎を増す、新鶏舎を建設中
- ・鶏が健康に育つ

今後ケージフリーを増やしたいと思いますか（自由回答） CF経営（背景黄色前向き回答）

○1万羽以上

- ・現在のところ正直足りていない状況だから
- ・人間も自然の一部、食・農産物は可能な限り自然に近い生産方法で取り組むべきだと思います
- ・安価での卵の生産が主力であるのはいかなものかと思う
- ・経営発展の為
- ・鶏の幸せ、人の幸せを考えて
- ・日本国全体で認知させるべきだと考えます。ただ義務化する必要はない
- ・鶏が楽しそうにしている為

○5千羽以上～1万羽未満

- ・生産が需要に追いついていないため
- ・日本では場所がなく難しい
- ・飼育羽数が多くなると内容の良い卵を生産する事が難しくなる為
- ・労働力と設備投資が必要なため
- ・平飼いとしてエイビアリーが増えても平飼い放牧とはコスト面で差が出る。消費者の理解が必要

○1千羽以上～5千羽未満

- ・人手が足りない、大変
- ・多くの消費者が大量生産された卵ではないものを求めている
- ・アニマルウェルフェアに配慮した飼育管理をすることでSDGsにも結びついていく
- ・鶏がかわいそう
- ・これ以上増やすことは不可能
- ・ストレスフリーになる鶏が多く広い環境で育てることができる
- ・日本の自給率向上の為
- ・後継者が見つかること、国の鳥インフルエンザ対策が「殺せ!」から、大きく舵を切ることが前提。属人化されている現状の放し飼い手法がこのままだと、後世に伝わらず消滅してしまう。YouTubeなどには、怪しく危険な放し飼い動画が多いのも、それに拍車をかけ危惧している。
- ・食の安全
- ・基本的に大規模集約化した商社養鶏は産地団地化、輸入飼料依存、鳥インフルリスクの問題を抱えていると思う。小規模分散で循環型の農業と平飼い養鶏は相性が良いと考える
- ・アニマルウェルフェアの観点から
- ・養鶏を始めたときから平飼い
- ・消費者の選択を作るため（安いものと高いものどちらを選ぶか）。ケージ飼いがいるから今の飼料価値が維持されている面もある
- ・養鶏業自体不要。小規模または個人の庭先養鶏で良い
- ・土地と販売先と人材の確保次第
- ・卵は必要だが生んでくれる鶏の気持ちになること、必要とするものは鶏に聞けばいい

○1千羽未満

- ・家畜であっても虐待は許されるべきではない。日本の養鶏の実態は虐待に近いと言わざるを得ない
- ・養鶏従事者が気持ちよく働ける環境が大切と考えている
- ・世界の動きに流されました
- ・この世はありとあらゆる生き物が命のバトンを繋いで生きている。感謝していただく鶏の命を大事に、そして最大の敬意を払う。生涯を終えるその日まで生きてて良かったと思ってもらえたら本望。
- ・回答者としては現状の規模を維持したいので増やしたいとは思って居ません、業界としてはもっと増えてほしいと思います
- ・自然養鶏に順応した方法のため
- ・人も鶏にも農業にも環境にも優しい養鶏をするべきと考えます
- ・ケージで飼うことなど論外である
- ・持続可能な技術だと思うから
- ・ケージフリーでしか養鶏はしていませんが鶏をケージに入れるのは虐待です。これ以上鳥インフルエンザウイルスの変異を加速させてはいけない
- ・鶏はもちろんだが育成する人間側や周辺住民への影響（異臭など）の改善がみられるはずだから
- ・本来ケージフリーが当たり前なやり方であってケージ飼いが異常
- ・始めからケージフリーで生産しているから
- ・需要がある
- ・狭いところに押し込むのはおかしい
- ・年ですから
- ・国内全体では増えて欲しいが私自身は現状維持が精一杯

今後ケージフリーを増やしたいと思いますか（自由回答） C経営（背景黄色 前向き回答）

○50万羽以上

- ・「在り方」と同じ
- ・販売先から要望
- ・コスト高になるから
- ・アニマルウェルフェアに考え方が増えてきているしその流れで少しはケージフリーを増やしていこうと考えています
- ・ケージフリーは私の経験からすると卵殻及び卵内における雑菌数が増える
- ・1羽当りの飼養面積はケージと余り変わらないため
- ・ケージにし卵価が上がりすぎると鶏卵を手軽に購入してもらいにいくくなる

○10万羽以上～50万羽未満

- ・農場の敷地面積が小さい為、ケージフリーにすると飼養羽数の減少になり生産量の減少
- ・今の体制で成り立っているから
- ・ケージの更新費用が大きい
- ・手間が増えるイメージがあるから
- ・ケージフリーはやりたい人だけがやれば良い
- ・ケージの更新は費用がかかる
- ・鶏に意見を聞いて下さい
- ・経費がかかるため
- ・鶏に対してストレスが少ないと思う
- ・ケージフリーでサルモネラフリーの確保が可能なのか？
- ・消費者に安価で安心である供給が基本。世界一高い生産費の日本。鶏は経済活動です。
- ・鶏舎更新の費用がかかる
- ・衛生的に維持する為の費用や労働力が足りない
- ・飼料コストが高いため日本では生産性を重視して飼養管理を勧める
- ・単位面積当たりの飼養羽数を増やしたいから(経営面から)
- ・衛生管理上良くない、労働者がケージ飼育より倍以上必要
- ・衛生管理上良くない(サルモネラ)、労働者がケージ飼育より倍以上必要
- ・ケージフリーは鶏にも人にも優しくない
- ・国が全額、設備費用を支援してくれるのであれば考えても良いが
- ・ケージフリーをするなら今の鶏舎を全部作り直さなければいけない上に羽数は3分の1以下にしないといけないし管理の手間、コストが3倍以上になると思う。AWのために飼っているわけではない、経済上効率を高める
- ・動物福祉(アニマルウェルフェア)の考え方は経済動物である事を前提に考えるべきだ

○1万羽以上～10万羽未満

- ・より付加価値商品(製品)を販売したいと考えているので平飼い(ケージフリー)も一部取り込みたいと思う
- ・土地、外的要因等、鶏病
- ・投資コストが高いため、消費者が選択できる環境を確保するのは良いと思います
- ・価格が上がり(現在の2倍)誰もが食べれなくなる。価格の安い鶏卵が外国から入ってくる。
- ・鶏は経済動物で狭い日本ではケージフリーは無理です。コストが高くなる。コクシジウムの病気問題等のため。
- ・生産効率が悪く、本来の目的である動物愛護ではなくなっている
- ・インフルエンザ対策が問題
- ・ケージであるから卵/鶏が清く保てる
- ・生産量が減って高卵価安定するので生産しやすくなる
- ・世の中の流れ
- ・敷地面積の問題で対応が難しい
- ・ケージもケージフリーもどちらも取り組むことでどちらのことについても実践に基づく知見を持つ。どちらの飼い方でも販売先を持つことで経営の安定を図る
- ・鶏の健康・環境のため
- ・個別管理が難しくなる
- ・リスクは増える。売価に反映できるか、おそらく出来ないため。

○1万羽未満

- ・大規模畑作も行いながらの家族経営の為、労働力確保が課題
- ・土地がない。生食文化。設備投資額が大きく次世代に継がせられるか悩む。
- ・設備更新がままならないほど一次産業の経営は大変なのに源資を用意できない

ケージフリーの鶏にとってのメリット・デメリット(自由回答) 並行生産

○CF5万羽以上

- ・メリットはないと思います、人間のエゴだと思います。エンリッチが一番いいと思います
- ・自由に動き回って良いと思うが競争が激しいので弱い鶏は生き残れない。弱った鶏をみんなで攻撃して殺してしまう
- ・人間的発想で考えるとケージフリーがあたかも鶏にとって幸せと人は言ってますが果たして鶏がそれを臨んでいるかどうかは疑問です

○CF1万羽以上～5万羽未満

- ・5つの自由に関すること
- ・鶏本来の習性に適した環境が形成される一方、労働環境の悪化。卵の製品化率の問題（コスト高）がある。
- ・弊社のエイビアリーでの鶏を見る限りは、肉付きも羽艶も良くメリットしか無いように感じます。鳴き声も優しく人間を恐れることもないです。糞尿などと接触することも無く元気に飛び回っていますが、やはり強い鶏と弱い鶏というのは出てきますので、それが鶏にとって良いのか悪いのか、それとも自然なことと捉えるのかはわかりません。
- ・鶏舎内で居場所、行動の選択の自由があることがメリットではないか、デメリットは鶏に聞かないとわかりません
- ・メリット:自由に動ける、デメリット:いじめられる鶏がいる、時々圧死する
- ・環境管理が良好な場合はストレスや苦痛が少なく行動欲求が満たされた健康的な生活が出来る。環境管理が悪化した場合はつつきが発生したり死亡率も高くなる

○CF 5千羽以上～1万羽未満

- ・自由に動き回れる。つつきが多い（いじめ）
- ・ケージ卵より確実に美味しい卵になるので鶏に福祉にとっては良いことではないか
- ・メリットは羽ばたきや敷料での砂浴び穴掘り、止まり木での休息といった本能に基づく行動の自由.デメリットは順位制のある生き物なのでどうしてもツツキ等いじめが発生する。またそのことでエサが均等に充分食べられない鶏が発生する

○CF 1千羽以上～5千羽未満

- ・自由に動ける分、多数が1羽をいじめる
- ・正直わからない

○CF1千羽未満

- ・メリットは鶏が健康になる、5つの自由、鶏の社会が出来伸び伸びしている。デメリットは鶏についての衛生管理が不十分だと重大な病気を誘発しかわいそう
- ・免疫力アップ、デメリットは特になし

ケージフリーの鶏にとってのメリット・デメリット(自由回答) CF経営

○1万羽以上

- ・鶏の健康
- ・鶏の社会の形成(生活ができる)。鶏の縦の社会のため強い鶏、弱い鶏ができる。
- ・鶏が羽ばたいたり砂浴びしたり止まり木で休むなど本来の行動が出来る点ではメリットがあるのではないかなと思う。一方、集団になるとペックオーダーなどでいじめられる鶏も少なからずおりそれも本来の行動であるが、気の毒にも見える。どっちが良いのかわからなくなる。
- ・割と自由、育ちで仲が悪いと逆効果
- ・ケージフリーと言っても監禁状態であることに変わりはない。少しでも環境を整えることで5大原則の実現に近づくと考えます
- ・メリット有り、デメリット無し

○5千羽以上～1万羽未満

- ・メリットは鶏の健康の増進、デメリットは平飼養鶏の技術が確立されていない
- ・自由に動ける、圧死、強弱の差が発生しやすい
- ・運動量も豊富に取る事ができそれが良い卵の生産に繋がる点
- ・そもそもメリットデメリットの話ではない
- ・鶏の糶子栄に沿った行動が出来るため活力がある。病気に強い。順位付けなどで鶏が痛みやすい。
- ・ケージ飼いを知らないのかわかりかねます

○1千羽以上～5千羽未満

- ・自由に動き回れるから健康で質の良い卵を産む、巣箱と巣外で産む鶏に分かれる。つつきやいじめがある最も自然に近い鶏にとっての生育環境に近い
 - ・鶏たちの習性が生かされ伸び伸びとした生活環境の中で健康で薬品に頼らない飼育が可能、悪臭がなく飼育できる事がメリット、デメリットはツツキ
 - ・ストレス緩和が大。鶏同士のけんか。
 - ・ストレスフリーで広い環境で育成することができる。鶏舎の広さにより鶏糞の処理が大変、つつきやいじめが発生しやすい
 - ・良い卵とは良い鶏の卵から良い鶏とは？で始めました。食べ、運動する、日に当たるがメリット。デメリットは思いつかない。
 - ・メリット・潜在能力を呼び覚まし、人間が地球上に現れる前に培った能力の上に立った、鶏らしい暮らしができること。またその能力が引き出されること。デメリット・鶏の持つ能力によって生存率が大きく変わる・アニマルウェルフェアの各項目は生産者の考え方で効果や深さが大きく変わる。止まり 木があってもそれがなぜ必要なのかを理解しようとせず、単に設置しました感を出すのは いかがなものか。
 - ・鶏にとっては無いと思う
 - ・よく運動することで良質な卵の生産につながる。デメリット：尻つつきが発生すると大変な数が死亡する
 - ・鶏舎の中で鶏を飼いたい肥を作る
 - ・集団で飼育しているのでどうしてもいじめやストレスはある。地面に接しているため病気のリスクも。
- つつきやいじめによるストレス
- ・過密に飼えばデメリットのみ
 - ・おいしい卵を産んでくれる、安心な卵を食べられる。手を加えることでなく手伝うぐらいに

○1千羽未満

- ・ストレス軽減、免疫力強化、個体をよく観察する必要がある
- ・メリット:止まり木で寝る、砂浴びをする、つつくなど本能を発揮できる。デメリット：土中のウイルスに接触するリスクあり。
- ・自由に運動が出来てストレスがたまりにくい
- ・どこまでのケージフリーによるかですが野生動物の格好の餌食となる
- ・自由に動き回れる、鶏本来の性質に合った生活が出来る。尻つつきや喰い負けなど群れになじめない個体が排除される
- ・鶏が健康になる為良質卵が得られる。飼育に長時間かかる。
- ・幸せな一生を送る事
- ・鶏の自由を第一に考えストレスを与えないようにしなければ健康な鶏にならないし健康な卵にもならない、食べる人間も健康にならない
- ・少なくともケージ飼いは鶏のストレスは少ないと思う。国産飼料での飼育が可。獣害のリスクが大きい。
- ・運動できる。他の鶏とのふれあい。寒いときは日向へ、暑いときは風通しの良い日陰へ。
- ・ケージフリーの飼養技術を持っている人が少なすぎるので鶏が体調不良を起こすこと。メリットは動き回ることにより動物としての最低限の自由が得られること。
- ・健康な成長が望めること。そしてその鶏が産む卵は売際にもイメージが良い。デメリットは特になし
- ・プラス：ストレスが減る、マイナス：つつき合い？ 私人間なので想像でしかないです、結局「人にとって」につながっちゃう
- ・メリットは自由に運動できることによるストレス軽減。デメリットは尻つつき等の発生
- ・鶏にとってはよりよい環境かと
- ・鶏にとっては何のメリットもない生産性だけのため.消費者も考え直すべき。
- ・精神衛生上とても良い、自由に歩ける、砂浴びできる、暑いときは木陰へ移動できる
- ・ストレス軽減、免疫向上、卵質向上など.デメリットはないのでは

ケージフリーの鶏にとってのメリット・デメリット(自由回答) C経営

○50万羽以上

- ・メリットは鶏の自由な行動発現。デメリットは糞と接触し疾病やサルモネラリスク
- ・メリット:鶏にとって優しい
- ・メリットは自由に動ける、デメリットは鶏フンをついばみコクシヤクリストの原因になり易い
- ・鶏でなく人間にデメリットが増す。日本人は卵を生食する為絶体にフリーはしない方がいい。ヨーロッパ、アメリカ、中国など日本以外の国は生食をしない
- ・鶏病
- ・管理が難しくなる

○10万羽以上～50万羽未満

- ・ストレスの緩和
- ・運動不足、ストレスの緩和
- ・床面の食糞、床敷のネズミによるインフルエンザのリスクが高い
- ・動き回れるからストレスが少ない、フンの上などを歩いてしまう
- ・ケージフリーの場合、鶏は自分の居場所を自分で見つける必要がある。他の鶏含む外敵から攻撃されないか警戒するストレスはあるか。集団で同じ方向へ移動すると圧死したり怪我をする可能性。
- ・デメリットは鶏糞を食べることがある、不衛生でネズミの温床になり易い。メリットなし。
- ・ストレスフリー、デメリット生存率、巢外卵
- ・順位が優先される鶏社会の中で大群飼育のストレス負担の配慮が不明確
- ・通路の敷料を食べる為不衛生
- ・メリットは好きに動ける、デメリットは辱められやすい、糞を踏んでしまい易い
- ・メリットは鶏が自由に活動できること。デメリットはあまりないと思う。
- ・鶏本来の姿に近い、ストレスが少ない。デメリットは特にない
- ・メリットは動き回れる、デメリットは鶏病が出やすい
- ・鶏本来の姿に近い、ストレスが少ない。デメリットは特にない
- ・鶏にとってメリットは特にない.デメリットは密飼いになる、汚くなる、病気が広がりやすい、ストレスが係りそう、もともとそんな大きな群れにならないのでは
- ・メリットはストレス無く生活できる、デメリットは病気のリスクが高まる
- ・あまりない、鶏に聞いて
- ・鶏にとってのメリットは感じない。デメリットは疾病リスクが増す、群飼育による社会的ストレス。

○1万羽以上～10万羽未満

- ・メリットはより高価格帯の商品のアップ。デメリットは生産効率の低下、疾病などのリスク。
- ・鶏にとってデメリットはないと思います、病気の発生リスクは高い
- ・メリットは鶏本来の行動に少しだけなる.デメリットは病気になりやすくなる可能性が高まる
- ・メリットなし、デメリット病気。
- ・衛生と病気の問題が多く鶏にとって良いことなのか疑問である
- ・卵の不安定性、鶏の健康、餌をバラバラ食べてしまう、縄張り争いなど
- ・鶏はケージに入れて産卵するように半世紀かけて改良された動物で、就巢性等ケージ飼育に適さない形質を排除した変態生物ですがそのことをどのように考えているのでしょうか
- ・鶏は自由になる分、つつきや餌の量が増える
- ・メリットはストレス軽減、デメリットは死鶏の発見が遅れる、鶏同士のけんか
- ・メリットは自由に動ける、好きなものをより好んで食べられる。デメリット鶏の特徴として優劣をつけて弱いものへのいじめは起こる＝必ずストレスフリーではない.優劣によりエサを十分に食べられてない鶏が出たりより好みをして食べることで栄養バランスが崩れて健康への影響もある
- ・鶏の健康／環境の為
- ・ある程度自由に移動できる。つつきやいじめで死ぬ確率が高くなる。フン等とちゃんと分離しないと病気のリスクは高まる。

○1万羽未満

- ・鶏がそこまで本当に求めているのかわからない。
- ・鶏は生物としてストレスが減ると思う。病気にかかったらすぐに発見できず治療が遅れパンデミックになる。

ケージフリーの経営・労働者にとってのメリット・デメリット(自由回答) 並行生産

OCF5万羽以上

- ・経営的には売り先が多いのでメリットは大きいが設備や人員に係る為支出も多い。労働者にとっては作業が大変
- ・AW団体から会社を守る
- ・アニマルウェルフェアと言うが決して管理者のヒューマンウェルフェアにはなっていない（EUとUSAも管理者はほぼ外国人労働者）

OCF1万羽以上～5万羽未満

- ・倫理的に誇れるようになる、後進に引き継ぎやすい
- ・経営としては取扱商品（鶏卵）の多様化により消費者へのアピールが可能。労働者にとっては労働環境の手間・悪化がある
- ・まだまだ適切な単価で販売するには、世間の「ケージフリー」の認知度ゆえにむずかしいのです。弊社はバタリー鶏舎もありますが、ケージフリーだけだとしたら成り立つ自信はまだありません。労働者にとっては思いの外手間がかかることは殆ど無いので、バタリーよりも大変ということはあまりありません。むしろ「良い卵を作りたい」という意識がみんなにうまれてきたので良かったと思っています。
- ・労働者にとってはより「生き物を飼育している」という感覚が強くなると考え、工業然としたケージ飼育よりやりがいを感じられる可と思います
- ・メリット:鶏と戯れることができる、デメリット:鶏がよってきて歩きづらい
- ・経営のイメージアップ、付加価値販売、差別化ができる。労働時間の増加（集卵作業や敷料などの整備、掃除）

OCF 5千羽以上～1万羽未満

- ・鶏とのふれあい、労働効率が悪い
- ・小規模生産者にとって自立経営が出来やすいと思う
- ・メリットは生産者として技量を試すことができる、やりがいがある、お客様に認めてもらうことができる。デメリットは手間暇がケージ飼いに比べて増える

OCF 1千羽以上～5千羽未満

- ・アピールにはなるが利益にはならない
- ・消費者の意識も年々深まっているが市場ではやはり安価な卵が売れる。仮に2割のブランド卵の市場がこれからの物価上昇もあり、4-5割になることは考えられない。ケージフリーが一般化した時にまた卵は安売り合戦になる
- ・羽数の飼育には大面積が必要である

OCF1千羽未満

- ・メリットは養鶏農家生産者のイメージ向上、生産者としてのやりがい、地域貢献、消費者とのつながり（食意識向上）など、新たな食意識改革が生まれる。デメリットは付加価値を伝えるまでの時間がかかりまた経営として初期投資と知識向上に価格設定に左右される
- ・高価格販売、コスト増

ケージフリーの経営・労働者にとってのメリット・デメリット(自由回答) CF経営

○1万羽以上

- ・確実に付加価値はつけられるが消費者は飼育方法と共に飼料（NON-GMOやオーガニック）やワクチン不使用なども求める事が多い。その対応はコスト増につながる。
- ・わりとゆったりした心境でいられる。体は疲れる。
- ・経済的なメリットは特別なものはない。倫理観を持って仕事に取り組んでいるという自負により貢献しているという意味は芽生える
- ・いきいきとしている様子を見ていて気持ちいい

○5千羽以上～1万羽未満

- ・労力、手間がかかる
- ・メリットはケージフリーで良い卵を作れば販売先が自然と増えていく点。デメリットはなかなか消費者にケージフリーが理解されない点。
- ・卵の需要があること。鶏と飼育者との距離が近く仕事に愛着がわくこと
- ・弊社の場合は会社の歴史に沿ってストーリーが出来ること。デメリットは生産コストが高いことによる販売価格

○1千羽以上～5千羽未満

- ・鶏の様子がよくわかる、害虫、獣害の対策がいる。手間がかかる。
- ・鶏と共に生きている実感がある
- ・悪臭がなくハエの発生がないので仕事のやりがいが出る
- ・デメリット大、卵が汚れる、けんかする
- ・鶏舎建設コストがシステムケージに比べるとかからない、常に鶏舎内と巣箱内をきれいに保つ必要があり清掃等に時間がかかる
- ・メリットは差別化、デメリットは労働過多。
- ・メリット：鶏の質が変わりそれに伴って卵の質が大きく変わり差別化／商品訴求が可能になる。鶏を一つの命があるものとして向き合うようになる。デメリット：人間の都合ではなく、鶏の都合に合わせ飼育する必要がある(メリット面も)。鶏や卵のばらつきが出るのは自然のことで、それを説明し理解してもらう必要が事あるごとに発生する用地の準備、敷料の確保、鶏ふんの処理等など飼育環境を整えるための経費と労力が高い技術が属人化してしまう過剰な動物愛護スピリッツを持つ人や家禽とペットを同等視する人などの対応に苦慮する。法律などで縛る衛生管理や飼育管理、予算の考え方は、一定規模のバタリー用であるため、そぐわないものが非常に多い。
- ・今後は国内消費のパイが少なくなる中、健康志向が高まり、ニーズは増えていく
- ・経営的には高価格で販売できる.労働者的には臭いの少なさ鶏を飼うやりがいがある
- ・労働環境の悪化
- ・小規模であれば農業生産との併業可能、機械化が難しい故に体力負荷
- ・餌やりと卵集めが手間だが苦にならない労働

○1千羽未満

- ・今の日本では利益は生み出せない、家畜も飼養者も喜びがある
- ・メリット：心地よく働く事ができる。デメリット：生産性が低い
- ・付加価値があり差別化でき高値で売れる、システムが進んでいない為工夫の余地があり面白みがある
- ・朝目が覚めて鶏が元気だと私も元気になる。精神衛生上、鶏にとっても人間にとってもメリットが大きい。
- ・商品の差別化、単位宴席当たりの飼育羽数が少ない、飼料効率が悪い

鶏の福祉に良い。労力がかかる。

- ・幸せで有意義な人生を送る事
- ・鶏を飼うことは人間の健全性を保つための行いであり様々なデメリットはできるだけなくなるように考えて取り組む。メリットは健康、お金ではない
- ・家族経営が可能
- ・単価を高く設定できる
- ・鶏卵の価格が基本的に安いのでケージ卵も含め平飼い卵は特に所得が上がらない。その割に365日の仕事でとてもストレスがある。メリットはちゃんと飼育できれば面白いように産卵率が向上する。
- ・付加価値が付けやすい、エサの材料費がかなり抑えられる。デメリットは自家労力でエサをやり採卵作業を行う必要がある。
- ・プラスは付加価値をつけて売れる、一思い浮かびません、なんだかんだ総合的に見ると+につながると思う
- ・付加価値をつけられる、野菜残渣の利用、コストが高い
- ・鶏舎の隅々までの目配り、環境整備を心がけることが大切
- ・循環型農業に組み入れた平飼い養鶏は野菜クズの処理、分の利用等で非常に良い

ケージフリーの経営・労働者にとってのメリット・デメリット(自由回答) c経営

○50万羽以上

- ・メリットはイメージアップ、デメリットは敷料からの粉塵、アンモニア増加による職場環境の悪化。
- ・生産量の低下、飼育羽数の低下
- ・労働負荷の増大
- ・メリットは販売戦略をやりやすい。デメリットは価格を上げられなければ赤字
- ・作業量が多くなる
- ・現在のケージでも人手不足なのでケージフリーは人材確保が難しい

○10万羽以上～50万羽未満

- ・従業員の増員となる
- ・人材、コストの倍増
- ・羽数減少による生産量の低下、訓練や巢外卵対応による人員確保
- ・衛生管理が届きにくい
- ・コスト以上の価格で売れるのであれば経営にとってメリット。管理の手間はバタリーと比較し増えるが労働者を増やし定時で帰れる仕組みとすればメリットもデメリットもない。
- ・現行よりも収容羽数が減る為収益性悪化。ネストへの訓練、巢外卵除去など労働性悪化
- ・ない
- ・美味しい卵ができる、デメリット作業性が悪い
- ・巢外卵の問題や衛生環境の保持等の不安要素がある
- ・巢外卵の除去、収容羽数減少によるデメリット
- ・メリットなし、コストが高い、不衛生になりやすい、様々な意味で効率が悪い
- ・自由が増える
- ・デメリットは飼養羽数がかせげず生産量が増やせない。メリットは高品質で高く売ることができる。
- ・卵の品質のクオリティが高い、ブランド化。飼育の人手がケージ飼育より倍以上必要。
- ・メリットは卵価に付加価値がつけられる。デメリットは設備の更新経費の大幅増大
- ・卵の品質やクオリティが高い、ブランド化。人手が倍以上必要
- ・メリットはない、強いていうなら他との差別化、デメリットは日々の観察が行き届かない。衛生的に良くない。価格に反映できるかどうかかわからない。労働時間が長くなる。
- ・メリットは対外的に印象が良くなる、デメリットは採卵の手間が増える
- ・メリットなし、面積当たりの羽数低下、エサ効率低下、鶏糞をどうするか、最後に出すのか、おがくず等敷くのか、まざると発酵鶏糞にはならない、死鶏を見る時、靴は鶏糞だらけ、多段のケージフリーだといろんなところが鶏糞まみれ
- ・メリットはない。管理に手間がかかり労働生産性が低くなる。単位面積当たりの生産量が減少し既存の消費量を賄うには多くの面積の開発が必要となり結果的に環境破壊につながる

○1万羽以上～10万羽未満

- ・メリットは鶏の行動性により労力は軽減されると思われる。デメリットはマニュアルの作成が難しい、予測不能の自体がある。
- ・生産性が低い、鶏舎の清掃、消毒等大変、鶏業対策
- ・メリットは販売方法を考えればブランド力強化につながる。デメリットはケージフリーはコストが高い、販売を間違えると失敗する
- ・経営コストアップ
- ・3倍の面積と努力が必要
- ・生産量が減りコストが上がる、卵価もあがる
- ・価格と販売量のバランス
- ・メリットはイメージが良くなる、デメリットは鶏の管理が大変になる
- ・作業負担が少なくなる。卵の品質が安定しにくい（食べる量のコントロールができない）。産卵率はケージと比べると下がる。卵に汚れがつきやすくB卵C卵となる率もアップする
- ・販売の適正価格
- ・何となく消費者のイメージは良くなる。コストがものすごく上昇する、何をするにも全てに手間がかかる。働く人の確保が難しい。

○1万羽未満

- ・手間が増える。以前テレビの特集で見たがこびりついた糞を掃除するのに時間と労力がかかっており経営者の自分がやりたくない仕事を従業員にやらせられない。
- 作業工程が増える。設備投資が増える。⇒消却できない。鶏の体調管理が難しくなる。⇒卵や肉の衛生面が不安になる。デメリット、リスクしかない。

ケージフリーに取り組む条件(自由回答) 特徴

C経営

- ・利益の出る仕組みができれば
- ・糞と鶏を分離できれば
- ・鶏にとって本当に必要だと理解できれば
- ・高付加価値展開を経営として決めれば
- ・一定の販売量が見込まれれば
- ・ケージが禁止になれば
- ・消費者の理解

CF経営

- ・表現方法の一定化
- ・国民の意識の変化

並行経営

- ・補助金
- ・ニーズの高まり
- ・販路の確保
- ・洗卵の表示
- ・政策
- ・消費者意識

自由回答は必ずしも階層内規模順の並びではない。
羽数階層区分は、並行生産経営・CF経営・C経営
で異なる。
概ね全回答を記載。
・が1経営の回答。

ケージフリーに取り組む条件(自由回答) 並行生産

○CF5万羽以上

- ・難しい問題

○CF1万羽以上～5万羽未満

- ・補助金などあれば
- ・すでに取り組んでいる
- ・“平飼い、放し飼い、ケージフリー、フリーレンジといった言葉を生産者以外で説明できる方はいないのは仕方ないが、違いを認識する必要が無いと思っている方も多い。餌に何を使っているのか？黄身の色はどのくらい濃いのか？というバタリー故の判断材料を求めてくる方が多いので、コストよりも世間の認知が上がれば、と思っている。弊社はウィンドレス鶏舎とエイビアリー+ウィンター・ガーデンの鶏舎がある。同じ鶏でもどちらの鶏舎で育てるかによって、成長度合いは大きく異なる。決してバタリーを否定する立場ではないが、数年前から安さではなく美味しさで喜んでもらえるタマゴ作りをしたいという想いからエイビアリーに辿り着いた。自分自身は動物福祉の意識が特別高いわけでもないが、国内の様々な養鶏場を見てきた立場で、色んな意味でなんとなく後ろめたい気持ちが拭えなかったため、せめて自社の養鶏場は生産現場から流通まで堂々と胸を張って全てを紹介できるものにしたいと思っていました。
- ・償却費が回収可能な契約での生産
- ・取引先やお客様等のニーズが高まれば
- ・販売先が確保され適正な価格で販売できる。労働力不足の解消、労働環境の改善、商品化率が向上。

○CF 5千羽以上～1万羽未満

- ・価格を受け入れていただける環境づくり
- ・生産環境の良さと販路の確保
- ・全量ケージ飼いの倍以上の値段で買い上げてもらえれば

○CF 1千羽以上～5千羽未満

- ・洗卵、無洗卵をきちんと表示すること
- ・ケージよりも収益性が良く(単位単価が高いというのではなく)、事業の継続に寄与するのであれば

○CF1千羽未満

- ・販売先を確保し長期短期の今後の国の長期的な政策と地域行政の支援などが必要
- ・消費者の意識が変わりきちんとした価値で買っていたければ

ケージフリーに取り組む条件(自由回答) CF経営

○1万羽以上

- ・フリー卵の価値が消費者に理解できればと思う。

○5千羽以上～1万羽未満

- ・表現方法の一定化が特定されれば良くなると思います。鶏舎外飼育もケージフリー鶏舎内飼育も分けられていないので問題があると思います
- ・敷地の確保

○1千羽以上～5千羽未満

- ・既に取り組んでいる
- ・鶏舎費用と人材確保
- ・国民全体の卵価に対する意識の変化(生産者だけが全てにおいて泣き寝入りする現状が続けば、最後にはそれ相応の因果報酬が消費者の身に降りかかる)・卵は鶏という生き物が産んでいるからこそ人間が食することができるという意識の変化
- ・そこから来る後継者の確保。まだまだ日本人は自分の食べているものがどこから来て、どうやって作られているのかをほとんど知りませんし、知ろうとする人も非常に少ない。良い食べ物は、良い材料からしか作り出せない。適正な価格には、環境保全のコストや生産に従事する全ての人達への公平な対価が含まれていなければならない。そのことを意識せず食べ物が当たり前にあると思い込むことは間違っていることに早く気付く必要がある。
- ・広い土地

○1千羽未満

- ・適正な価格で卵が認識されること、持続可能な生産が出来ること
- ・国や家畜保健所が定める飼養衛生管理が存在しないのであれば鶏の起源は原生林といわれているので生物多様性の環境で飼育してあげたい
- ・労働に見合う収入が見合えばよい
- ・土の上で飼える土地と3.3㎡あたり7羽ほどの広さが鶏舎に求められること
- ・コストがペイできること

ケージフリーに取り組む条件(自由回答) C経営

○50万羽以上

- ・生産コストの増加を補ってあまりある利益。敷料と糞を分離してサルモネラ・疾病リスク低減
- ・資材単価がケージの単価とあまり変わらず販売単価も生産者が納得できる単価で販売できること
- ・ケージフリーでもフンが鶏と分離できれば良い。排泄されたフンが短時間で分離されなければならない
- ・見合った金額で売れるのであれば

○10万羽以上～50万羽未満

- ・卵価が相場の2倍以上となること
- ・多額の援助、人員の確保
- ・利益が出る仕組みができれば。
- ・国がお金を出せば
- ・今の卵価と別にケージフリーに卵価ができること
- ・鶏にとって本当に必要な問題だと言うことが理解できれば
- ・国からの助成と経営安定の対策があれば良い
- ・顧客が高い卵を文句なく買ってくれたら
- ・生産量が増やせない点をクリアできれば取り組んでも良い
- ・人材を確保できれば。
- ・法的規制と国による設備更新の補助金のセット
- ・人材を確保できれば。
- ・卵が10倍の値段で売れるようなら取り組んでもいいかもしれないが
- ・設備の更新にかかる莫大な費用を手厚く補助してくれたら
- ・買取値5倍以上、売りだと1000円くらい(10個)、もっと安く売っているところもあると思うが本当なら最低そのくらい

○1万羽以上～10万羽未満

- ・直売する商品(高付加価値商品)へのラインナップを決断した時(実際にお客様からの要望が多い)
- ・国県市が生産者に対して半額補助、消費者取引先が生産コストに見合った販売単価での購入があれば取り組んでも良い
- ・消費者が決めることだと思います
- ・現状では無理(人員、資金)
- ・ケージ飼育禁止になれば取り組みます
- ・一定量の販売が見込まれるとき
- ・国の経済的支援
- ・合う価格での販売の契約がある場合
- ・卵の価格
- ・卵1個200円を買ってくれる経済状況、もしくはそれを補う補助金があること。においや死鶏を気にせず働く人材の確保。ケージフリーがどれだけ大変か理解できる消費者がいること。

○1万羽未満

- ・労働力の確保、販売先確保、相応の価格設定ができること
- ・それぞれの認識、経営で考えれば良い。差別化と思えば差別化だし汚いと思えばやらない方が良い。ルールとして決める必要はないと思う。
- ・消費者の理解があれば
- ・ヨーロッパでスタートすることが多いがそれを各国が受け入れるのがとても不思議です。

まとめ

アンケート調査結果からケージフリー比率（3.17％）は高めにしている可能性がある（成鶏羽数の21.7％という捕捉率からの推測）。これを踏まえた上でも、以下のことが指摘できる。

- 1 日本のケージフリー採卵鶏は、ケージとケージフリーを両方生産する経営によって、多くが飼養されている
しかしケージフリーの経営数はケージフリーのみの経営がより多いと思われる
- 2 並行生産経営とCF経営では採卵鶏業に対する考え方に違いがある
同様に、C経営とCF経営にも考え方の違いがありそうである
ただし、同じC経営、CF経営でも、考え方にかなりの幅がありそうである
- 3 ケージフリー生産に関する設備や飼養スペースなどは、EUの基準を中心に整えられている可能性がある
- 4 ケージフリーの技術・経営課題は明らかであり、技術研究、経営サポートのための組織・政策が求められる
- 5 ケージフリーの経営課題の中心は価格・販路であり、経営形態・規模を問わない
しかし並行経営・CF経営いずれも、ケージフリーの生産拡大意欲が強い
- 6 ケージのみ経営は、状況次第で、ケージフリーに取り組む可能性を否定できない
並行生産経営の動機をふまえれば、社会ニーズに対応してケージフリーに取り組む可能性がある
- 7 アニマルウェルフェアの観点から 5つの自由 5つの領域 を理解するための活動は引き続き重要

残された課題

- 1 ケージフリー調査の発展的継続
 - ・ ケージ経営がケージフリーに取組む可能性とケージフリー生産の普及
ケージフリー生産構造の解明（ケージとケージフリーの共存のあり方）
 - ・ ケージフリー卵の需要構造・消費者理解の解明
- 2 鶏卵需給の短期・中長期見通しの精査とCF市場への影響
 - ・ 販路・価格・コストはCFにとって課題である一方、ケージフリー生産拡大意欲の背景・根拠の解明
CF卵は過剰か不足か？
 - ・ 鶏卵全体の需給構造：2019年度265.0万トンがピーク
2020年度～2023年度 247.8万トンまで4年連続生産減少（食料需給表）
2024年 248.1万トン（鶏卵流通統計調査）
2025年 220～230万トンの推計（日本養鶏協会、2025.3）
⇒ 6年連続「減少傾向」。265万tから40万トン程度生産減。
政府の2025年「基本計画」は2030年は生産量252万トンの見込み
ただし日本養鶏協会は20205年3月、2030年見通しを、需要265万トン、供給277万トンと約4.5%過剰を見込む。
⇒ 「基本計画」と「減少傾向」のギャップの精査。
- 3 ケージフリー生産のための技術・経営のプラットフォームの必要性
- 4 調査・研究手法の改善
 - ・ 捕捉率向上の方法論の検討
- 5 採卵鶏業の持続可能な発展
 - ・ 経営タイプ別、6次産業化、飼料用米活用と耕畜連携、飼料施設産業や食品産業との関わり